

---

# Like A Wind

白銀

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

Like A Wind

### 【Nコード】

N4515B

### 【作者名】

白銀

### 【あらすじ】

クリーチャーから街を守るハントとアルバイトで生計を立てる少年、スラッグ。彼の前に真紅の目を持つ青年が現れた時、スラッグの運命は動き出す。

## 序章 「エンジェル」

### 序章 「エンジェル」

辺りは静まり返り、虫の声すら聞こえない。生物と名のつく全ての存在の出ず物音は既になく、夜の暗闇の中には不気味な空気だけが流れていた。

だが、その中でただ一つだけ、物音を発している存在があった。人、それも男だ。

呼吸を乱れさせ、流れる汗も拭わずに、明らかに何かに怯えた様子で走り続けている。まるで何かに追われているかのように。恐らくは、自分が住んでいるであろう街へ向かって。

生命体の気配はその男以外には感じられず、あるとすれば男を脅かしている存在くらいだろう。

「！」

男が驚愕に目を見開いた。

彼の目の前に、何かがいた。

犬のような、四足歩行型の獣に近い見た目をしているが、犬ではない。大型の犬よりもまだ一回りほどは大きく、体長は成人男性ぐらいいはあるだろう。無論、異様なのは大きさだけではない。目という部分は赤く、口には大きな牙が、前足には鋭利な爪を持っている。爪や牙は人間など簡単に殺傷できるものと見て間違いない。

加えて、闇に溶け込むかのような黒い体毛は犬のそれよりも丈夫なものだ。その獣自体の生命力も半端なものではなく、銃弾を二、三発撃ち込んだぐらいでは生命活動を停止しない。

「！」

物音に振り返った男が、言葉を失った。

彼の背後には、また別の獣がいた。

人間の四倍はあるであろう、二足歩行型の獣だ。その体毛はやは

り黒色で、目は赤い。筋肉が発達していると言えるのだろう、その腕は太く大きい。その巨大な体躯から繰り出される攻撃の破壊力は凄まじく、人間では到底敵わない事は明白だ。通常の銃のような兵器で倒せる相手ではない。

「！」

男の左右の道を塞ぐかのように、四足歩行獣が更に二体現れ、男は身体を震わせた。

逃げ場は塞がれていた。もっとも、元々それらの獣から逃げる事が無駄な抵抗でしかない事は解っていたのだろう。それでも逃げようとするのは、生物の本能だ。

獣達が男に飛び掛ろうと身構えたのが、彼にも伝わっただろう。目を閉じたくても、それができない。身体を動かし、最後のあがきをしたくとも、恐怖で身体が動かない。何もできずに、男がただ死を覚悟した瞬間だった。

目の前の四足歩行獣に上空から急降下してきた炎が命中した。凄まじいまでの熱気が周囲に拡散し、男の頬を撫で、同時にその炎が放つ明かりにその場が照らし出される。獣が吠え、身体を炎に包まれながらも男へと飛び掛ろうとするが、ぐらつきながら一步を踏み出した所で力尽き、倒れた。肉の焦げる臭いを放ちながら、獣が朽ち果てていく。それと同時に、獣を包んでいた炎も消えていた。

背後で発された明かりに男が振り向けば、そこには一人の青年が背を向けて立っていた。

左右に掲げた腕には立ち上る陽炎を身に纏うかのように熱気を纏わせ、その凄まじいまでの熱気は掌に炎として集約させている。炎が照らし出す明かりの中で、青年の背中、服の下から生えているような一對の大きな翼が男の目に映っていた。純白の光を帯びた、神秘的な感覚を湧き起こさせる翼だった。

青年が、左右の手に纏った熱気を炎へと集約させ、左右の獣へと撃ち出した。熱量が風を起こし、陽炎が視界を揺らし、周囲に熱気を振り撒く。避ける間すらなく獣に炎が命中し、急速に焼き尽くし

ていった。

現実離れし過ぎた光景に、男は声を発する事ができなかつた。

目の前の巨大な二足歩行獣が青年へと腕を振り回そうと掲げた瞬間、青年がその獣へと手をかざす。その直後には何かが弾けるような音と共に、獣が振り上げた腕が千切れ飛んでいた。間を置かずに破裂音が二つ続き、獣の頭と腹が吹き飛んでいる。

絶命した獣の巨躯が地面に音を立てて崩れ落ちる。

「……天使……」

男は、青年を見てただそれだけ呟いた。

## 第一章 「ムーヴ」

### 第一章 「ムーヴ」

ソファの上で昼寝から目を覚まし、壁にかかっている時計へと視線だけを向けた。三時を少し過ぎた程度の時間帯。

「んー……」

ソファの上に寝転んだまま、身体を逸らすように背伸びをする。

そろそろ起きておかないと夜に眠れなくなりそうだ。それに、夕食の準備もできない。

スラッグは身を起こし、長めの髪を掻いた。ソファから立ち上がり、部屋の奥にある階段まで歩くと、そこから二階を見上げて口を開く。

「おい、レイシエ！ そろそろ行くぞー！」

「はい！ ちょっと待ってー！」

そのスラッグの呼び掛けに、二階からは直ぐに返事が返ってきた。それからドアの開く音と足音がして一人の少女が階段を下りてくる。蜂蜜色の綺麗なセミロングの髪に、平均的な身体つきと少し大きめの瞳。左目よりも右目の瞳の方が青さが濃いという、特徴を持つ少女だ。

同じ家に住んでいるとはいえ、彼女はスラッグの妹ではない。一歳年下ではあるが、幼馴染みだ。

「またあの本読んでたのか？」

「うん。だって面白いもの」

スラッグの言葉にレイシエが頷いた。

「何ていうかさ、果てしなく世界が続いている感じがいいの」

笑みを浮かべて答えるレイシエに、スラッグは肩を竦めた。

別に、彼女の言っている事がくだらない事だとは思っている訳ではない。ただ、彼女がその本をいつも読んでいる事に対しての行動

だ。昔から、その本を見つけた時から、彼女はその本を何度も何度も読み返している。読書が好きで、確かに他にも本を読んではいるが、スラッグが言った「あの本」は読み返している回数が半端ではない。

理由は、スラッグにもなんとなく解る。

「じゃあ行こうぜ」

言いながら、スラッグはポケットから取り出した、小さなベルトのような紐で長めの後ろ髪を束ねた。

二人が住んでいるのは小さな家だ。二階建てで、リビングとダイニングが一体となった大きな一階に、二人分の個室があるだけの小さな家。安い物件だった事もあって、ハイスクールには進学せず数年前から二人で住んでいた。

この生活になった理由はスラッグにある。スラッグが外出している間に、家が放火され、スラッグ一人だけが残されたのだ。そうして、一人残されたスラッグは今住んでいる物件を格安で売ってもらい、住み始めたのだが、近所に住んでいたレイシエが一人では心配だと言って着いてきたのであった。

「夕飯、何にしよっか？」

隣を歩くレイシエが問いかけてくる。

現在、二人はアルバイトやハントなどで生計を立てている。ハントというのは、街の外に度々現れるクリーチャーを狩り、街への影響を防ぐ仕事だ。

動物とは明らかに異なる、攻撃的な生命体であるクリーチャーという存在から街を守るために、現時点では二つの手立てが取られている。一つは、人間が住む集落を一つの単位として、単位毎に強固な外壁を設置し、クリーチャーの侵入を防いでいる。もう一つが、クリーチャーを狩る仕事を設ける事だ。

腕に自身のある者は自分達で装備を揃え、街や都市の周囲にいるクリーチャーを無作為に排除していく。クリーチャーという存在がいる事で、外界に出るだけでも危険なため、外に出て規定の時間を

越えて帰還すれば一定の報酬が貰えるシステムになっている。

また、絶命させたクリーチャーを、状態の良いものを街まで回収し、政府などに引き渡せば高額で買い取ってくれるのだ。クリーチャーに対する研究は少し前から行われているが、あまり成果は上がっておらず、サンプルが常に不足しているのである。もっとも、単体のクリーチャーですら基本的に人間一人では太刀打ちできないため、絶命させる際には手加減などできるはずもなく、原型を留めていない、つまりサンプルとして役に立たない状態のものの場合が多い。

「ハントの報酬で外食でもしようぜ」

「ふーん……。私の料理が食べ飽きたんだ？」

スラッグの言葉にレイシエが流し目で呟く。

「そういう意味じゃない。贅沢しようって事だよ」

溜め息をついて、スラッグは否定する。

普段、スラッグとレイシエは自炊しているが、食事を作るのは定期的な交替しているのだ。今はレイシエが食事を作っている時期なのだった。

「解ってる解ってる」

一転して笑いながら返答するレイシエにスラッグは溜め息交じりに苦笑する。

ふと見れば、隣にいるレイシエの向こう、道の脇に立つ店のショーウィンドウの中にある鏡に、自分の顔が映っていた。少しだけ長めの前髪に、後ろ髪を束ねた、スラッグ。右目は黒色なのに、左目が翠色という、普通の人間とは違う特徴を持つ、自分の顔。

本来ならばその部位には発生しないはずの色素が、スラッグの左目にはあった。だが、だからといって周りの人がスラッグに対して何かした訳でもない。スラッグ自身も、突然変異というヤツだろうと考え、気にしてはいない。それに

『 スラッグの左目って、翡翠みたいで綺麗だよね』

昔、レイシエは笑顔でそう言った。

「……ん？ どうしたの？」

「ああ、いや、別に」

かつての光景を思い出しながら、レイシエの顔を見つめていた事に気付き、スラッグは首を振った。

同棲しているとはいえ、レイシエにはスラッグと付き合っているという感覚はないらしい。周りはカップルとして見ているのかも知れないし、実際に見られた時もあったが、レイシエはそれが冗談なのだとは勘違いしてさらっと受け流してしまっている。最初はレイシエを意識していたスラッグも、暫く立つうちに慣れてしまっていた。

やがて、二人が辿り着いたのは街の中と外とを隔てる外壁の出入り口の脇にある建物だった。ハントをする者、ハンター達からは『局』と呼ばれているそこは、人間の出入りの管理やハントに出る者達の報酬の支払いや、有料で準備などを手伝ってくれる場所である。

建物内に入り、受付の前に立つ。そこでハントに出るといふ旨を告げ、クリーチャーを倒した証とするための器具を受け取った。倒したクリーチャーの肉片、つまり細胞を採取する事で、ハントをしているという事を確認するためのものだ。サボっていた者に報酬を与えないようにするための処置だ。

そうして、外壁の前に立ち、巨大な、厚い隔壁が開くのを待ち、外へと出た。

「やっぱ、外の方が風が気持ち良いよな」

笑みを浮かべ、スラッグは背伸びをする。

外壁がある事で、街の中と外では様々な事に差異がある。雨などは変わらないが、一番違うのは風だ。外壁内部では、外壁が外界の風を遮ってしまうため、外壁のない街の上部の部分から風が吹くため、風が弱いのである。

顔に当たる風が前髪を撫で、後ろ髪を背中から浮かせるように流れていく。

昔から、スラッグは風が好きだった。そのせいか、スラッグは他の人間よりも多少風に敏感だった。

「じゃあ、行こうぜ」

そう言って、持ってきた装備を手にする。

スラッグは拳銃を二丁、両手に持ち、レイシエはサブマシンガンを片手に提げた。薬莢のない、一般的なタイプの銃だ。

「街の外に出るのも一ヶ月ぶりくらいかな」

レイシエが呟く。

街の外、というのは二種類がある。その文字通り、人間が住む区画と決めた範囲の外が一つ。もう一つは、交易路として繋がられた、外壁で覆われた通路だ。ほぼ一直線に、他の都市などに直結した通路だ。

交易路の方は通常の外壁と違い、破損した際に直ぐに修理ができないため、普段は閉ざされている。しかし、交易は必要なものであるため、その時のみに限って開通するのだ。人が都市間を移動する際は、その時に便乗するのがほとんどである。

交易路ではない、街の外を通って他の都市に移動するような人間は今では皆無だ。たとえいたとしても数えるほどだろう。クリーチャーに狙われて狩られるのがオチだ。

「どのくらい狩れるかな？」

「三体ぐらいはいけるんじゃないか？」

レイシエの言葉に、スラッグは答えた。

命懸けの仕事でもあるため、ハントの報酬は高めだ。一度成功すれば、一、二週間は働かなくとも生きていけるほどの額が手に入る。サンプルとして使える、原型を留めたクリーチャーを回収すればその倍は確実だ。

もっとも、クリーチャーを倒すための装備を維持するのにもそれなりの資金が必要で、続けるのは中々難しい稼業でもある。

風が変わった。

一瞬吹き付けた軽い風に、スラッグはそう感じた。

「来るぞ」

レイシエに言葉を投げ、スラッグは周囲に視線を走らせる。

右前方には森に近い状態の雑木林があり、視界が悪い。対して左前方は平原で見通しが良い。この状態でクリーチャーが現れるならば、まず林の方からだ。

林の中から何かが蠢く音が風に乗って伝わってくる。近付いてくる音に、スラッグが集中力を注ぐ。隣ではレイシエが銃口を林の方へ向け、警戒していた。

「！」

前から押し寄せるように感じた風の動きに、スラッグは反射的に銃の引き金を引いていた。左右の銃が規則的に弾丸を吐き出し、前方の林から飛び出してきた獣型のクリーチャーへと吸い込まれるように命中していく。一瞬遅れて、レイシエのサブマシンガンが火を吹いた。

大量の弾丸を浴び、クリーチャーが空中にいるにも関わらずに後方へと吹き飛んだ。

黒い、狼などの肉食獣に近い、最も低レベルのクリーチャーだった。他に類を見ない漆黒の体は他の生命体とは根本的に何か異なる事を周囲に示し、同時に通常の銃弾では致命傷にならない強度をも持ち合わせている。既に常識となっている事だ。

クリーチャーを倒す方法は、絶命するまでひたすら銃弾を打ち込むか、急所に強烈な一撃を打ち込むかの二つしかない。人間よりも数段素早いクリーチャーの急所に攻撃を命中させるのは難しく、ほとんどが前者の排除方法を取る。そのためか、ハントに用いられる武器は常に威力の強化を図られ続けている。

「……まだ、だよな？」

レイシエが問う。

答えるよりも早く、スラッグは銃口の位置を修正して引き金を引いていた。吐き出される弾丸が、再度飛び掛ろうとするクリーチャーに吸い込まれていく。

（弾切れ！）

両手の銃のグリップから同時に弾倉を排出し、右手の拳銃を空中

へ放り上げる。その拳銃が空中にある間に空いた右手で弾倉を二つ取り出し片方を左手の銃に押し込むと、左手の拳銃を放り上げ、右手に受け取った拳銃に空けた左手で弾倉を押し込んだ。そうして、右手の拳銃をクリーチャーに向けて引き金を引き、一瞬遅れて落下してきたもう一方の拳銃を左手で受け止めるとすぐさまクリーチャーへと発砲した。

身体から白い血を吐き出しながら、クリーチャーはなおもスラッグ達へと立ち向かってくる。その尽くを拳銃とサブマシンガンで押し返し、スラッグ達は弾丸を浴びせ続けた。命中した弾丸の多さに、次第に身体の一部が削り取られるかのように吹き飛び、切り離されていく。

スラッグが四マガジン分、レイシエが六マガジン分の弾丸を撃ちつくしたところで、クリーチャーが動かなくなった。四本の足が付け根から千切れ、首にも数発、胸部や腹部には数十発の弾丸を受けたところであろうやく絶命したのだ。

「サンプルには使えそうにないな」

スラッグは呟き、排出したマガジンを拾い集める。

「弾は残ってる？」

「同じように戦えればあと一体はいけるぞ」

レイシエに言い、スラッグは空のマガジンを持ってきたポーチに収めた。そして、親指大のカプセル状の器具を取り出し、倒したばかりのクリーチャーの細胞をその中に入れる。それを提出すればハントの報酬が貰えるのだ。

「移動しよっか？」

「そうだな」

レイシエの提案に頷き、スラッグは平原の方へと歩き始めた。

見晴らしの良い方がクリーチャーを早く察知できる上、障害物が少ないために狙いやすい。クリーチャーにはそこに人間がいる事が解るのか、そう時間を空けずとも直ぐに現れる。そのため、外壁で覆われていない都市の外に長時間いる事は危険なのだ。

ただ、人より少しだけ反射神経と身体能力に優れたスラッグとレイシエだけは、クリーチャーに相對してもそれ程取り乱さずに行動できる。人間を上回る身体能力を持つクリーチャーに対して、二人がかりでならば優位に立てるのだ。初めての頃は緊張もしたが、今ではそれもあまりない。

「……？」

不意に、風向きが変わったような気がした。

「どうかした？ 来たの？」

「いや、それとは違う……気のせいかもしれないけど」

反射的にレイシエが問うが、スラッグは曖昧な返答しか返せなかった。

風を読めるとでもいうのだろうか、スラッグの勘は開けた場所ではかなり有効なリーダーにもなっている。それは今までの経験からレイシエだけでなくスラッグ自身も感じていた。風の微細な変化を感じ取り、その変化を起こしたものの存在を感知するというもの。その勘を、レイシエも頼りにしている。

だが、その瞬間に感じた風はクリーチャーの類が動いた際の変動が引き起こしたものではなかった。今まで感じてきたクリーチャーの起こす風とは違うと感じたのだ。

「……！ 今度はクリーチャーだ！」

感じ取った風に、スラッグはその勘が示した方向へと身体を向けた。

「 まずい、反対側からもう一体くるぞ！」

瞬間的に、背後からの風を読み取ったスラッグがレイシエに言葉を投げる。

「どうするの！」

「そっちは任せた！ できるだけ早く片付ける！」

レイシエの問いに答え、スラッグは駆け出した。

背後からのクリーチャーをレイシエが足止めしている間に、前方から迫るクリーチャーを素早く倒し、直ぐにレイシエと合流するの

が手っ取り早い。それに、考えている余裕も少ない。

前方から飛び掛ってくるクリーチャーに銃弾を撃ち込みながら、横へ跳んで前足の攻撃をかわす。クリーチャーが着地し、向きを変え、瞬間に、スラッグは既に次の攻撃の回避行動に移っていた。肌を感じる風が、安全な場所を教えてくれている気がした。

身体を低くして突撃してくるクリーチャーへとスラッグが足を踏み出す。クリーチャーが後ろ足を蹴って加速した瞬間、スラッグは左右の足の位置を組み替え背を向けると同時に背面跳びの要領で地面を蹴った。交錯する瞬間、クリーチャーが向きを変えようと速度を落とし身体を捻る。その真上を飛び越えるスラッグはクリーチャーの頭が見えた瞬間に銃口を向け、引き金を引いていた。

発砲の反動で、宙に浮いた身体が今までのベクトルの方向からずれる。その発砲の反動を利用して、身体を回転させると片手を地面に着き、続いて足を着地させた。

クリーチャーは行動を制御する脳を撃ち抜かれ、白い血を流して絶命していた。その死骸を飛び越え、スラッグはレイシエを残してきた方角へと駆け出した。

見れば、クリーチャー目掛けてサブマシンガンの弾丸を放っているレイシエが見えた。左右に動き回るクリーチャーに致命傷は与えられていないが、レイシエ自身にもクリーチャーが近付けないでいる。足止め、時間稼ぎはできていた。

「レイシエ離れる！」

叫び、タイミングを見計らってポーチから取り出していたスタングレネードを投げる。轟音と共に凄まじい閃光が放たれ、クリーチャーを覆い隠した。

感覚器官が鋭敏なクリーチャーに対して、感覚器官に強い刺激を与えて麻痺させるスタングレネードは有効な武器だ。ただ、投げてから爆発に時間がかかる事と、上手くクリーチャーの目の前で炸裂させなければならなかったため、攻撃としての扱いは難しいだろう。

そうして、一時的に感覚が麻痺したクリーチャーがその場で失神

しているところを、急所に銃弾を打ち込んで仕留めた。スタングレネードが有効とはいえ、感覚器官の麻痺が正常に戻るのも早いのである。隙があれば直ぐに仕留めておかなければならない。

「ふう、間に合ったな」

「危なかったわ。丁度弾切れよ」

スラッグの言葉に、レイシエが呟いた。

手早くカプセルにクリーチャーの細胞を採取すると、最も状態の良い、二体目のクリーチャーを引き摺りながら外壁の出入り口へと向かった。

スラッグとレイシエは家の近くのレストランで夕食を取っていた。ハントが予想以上に早く終わった事もあって、混み合う時間帯よりも少し早めにレストランに来れた。人はいるが、混んでいるという程ではない。

「……………」  
既に料理はあらかた食べ終えていたスラッグは小さく溜め息をついた。

最近、妙に風がざわついてるんだよなあ……………。

風を読めるという能力がもたらすのはクリーチャーの動きの察知だけではない。もっと遠い場所で起きた異変なども時として運んでくる。自分の行動範囲外で起きた事象すらも時折感じられるのだが、そういった場合、原因をスラッグが実際に目にする事はない。気になると感じてしまうのが恨めしい。

ただ、今回のだけは何かが違う。今までの異変がもたらした風とは、肌触りが違った。知らず知らずスラッグは身震いをしていた。

「……………スラッグ、どうかした？」

レイシエの声にスラッグは正気に戻った。

「いや、ちよつと考え事」

そう曖昧に返事をする事しかできず、スラッグはまた溜め息をつく。

風を読めるのはスラッグだけだ。レイシエに話してもどうにもならない事は今までの経験から解っている。理解は示してくれるものの、実際に風を読めるわけではないレイシエにはその感覚が解らないのだ。説明のしようもない。

いつまでこんな生活が続くんたる……。

頬杖をつき、今はもう空になつたサイダーの入っていたグラスの中の氷をストローで掻き回しながら思う。

別段、今の生活に不満があるわけでもない。レイシエと過ごす毎日に物足りない事があるわけではない。食事は十分に取れるし、TVゲームのような娯楽もある。仕事はアルバイトとハントを気まぐれに選んでやっているが、最近は専らハントばかりしていた。報酬が良いだけではなく、スラッグには外の風に触れたいという気持ちもあるわけだが。

もし、不満があるとすれば、レイシエとの関係ぐらいだろう。

「スラッグ！ そろそろ店を出ようよ」

「あ、そ、そうだな」

数回呼びかけてうたのだろうレイシエに慌てて答え、スラッグは席を立つた。

勘定を払い、店を出る。

「ん？」

店を出た直ぐ近く、道路の真ん中に人だかりができていた。

「何かしら？」

「またあいつ等だろ、関わらない方が良いつて」

言い聞かせ、帰ろうとするが、レイシエは人だかりの方へと走って行ってしまふ。それに溜め息をつき、スラッグも追いかけるように走り出した。

人だかりの中央には大柄な男達が数人と、それでもない者達が数人がみ合っていた。

「……デリックかよ」

レイシエの隣に追いついたスラッグが小さく吐き捨てる。

スラッグが指し示したの大柄な男達の中央にいる、一番厳つい顔をした大男だ。ハントを生業にしている者の中で、この街では最も有名な男だ。理由は簡単、腕は確かだが、そのせいか性格が悪い。典型的な力任せのタイプだ。

スラッグには苦手なタイプである。

ハントを生業にするハンターの中には、少なからずそういった輩が出てしまう。自分達が街を守っているのだと言い、好き勝手に横暴するのだ。故にハンターに対して良い顔をする者は多くない。

スラッグ達はハントをしているが、ハンターだと自ら名乗る事はない。生活資金に余裕がなくなりそうだと判断したら手っ取り早い資金補充の手段としてハントをしているだけだ。また、レイシエはデリック達のようなハンターを毛嫌いしている。今のようなトラブルに顔を突っ込んで、実際に対処するのはレイシエでは力不足だと判断したスラッグだ。風を読めるスラッグがデリック達を撃退する。そうして、そんな事が数回繰り返されているため、デリックのような者達からスラッグやレイシエは目の仇にされている。正直、スラッグとしてはいい加減にして欲しい状況だ。

「また何かしたのね！」

「お、おい、レイシエ！」

人ごみを掻き分けてレイシエが進んで行くのを、スラッグは追うしかない。

確かにレイシエでも普通の人間を二、三人ぐらい相手にできるが、デリックはそうもいかない相手だ。これ見よがしに鍛え抜かれた身体は人一倍反射神経も運動能力も高い。レイシエでは勝てない。周囲の風の動き、敵の動きを見切れるスラッグでもなければ、デリックの攻撃を避けるのは至難の業だ。

「騒々しいっ！」

突如、鋭い声が飛ばされた。周囲は静まり返り、声のした主から人が離れ、その人物とデリック達との間に道が作られる。

「誰だろ……？」

レイシエが呟いたのが聞こえた。  
見れば、一人の青年が立っている。

「あいつ……」

スラッグは感じた。視線の先の青年は、何か、他の者とは異質な空気を纏っている。それだけではない、その青年の両目は真紅だった。目に色素のない場合、光の反射によっては目が赤く見えたりもするそうだが、そういった類のものではない。

「何だ、てめえ……」

デリックが不愉快そうに口を曲げた。

「通行の邪魔。それに目障り耳障り」

臆した様子もなく、青年はさらさらと挑発的な言葉を並べる。

その言葉にキレたデリックの仲間が数人、青年に飛び掛った。瞬間、青年の目がすつと細められる。

次の瞬間、デリックの仲間の顎を下方から蹴り上げて上空に吹き飛ばし、他の男に対して、軸足を回転させて回し蹴りを放つ。両足を地面に着けた後で襲い掛かって来た三人目には、懐に踏み込んで肘打ちを命中させていた。

……速い！

感じた風の動きに、スラッグは息を呑んだ。恐らく、スラッグでも敵わないだろう反射神経と身体能力を持っている。

「弱過ぎだな。あんたも掛かって来るか？ 相手ならしてやるぜ？」

表情一つ変えず、淡々と言葉を放つ青年に、デリックが歩み出た。

「……後悔するなよ？」

「そつちこそ」

言い、デリックが振るった拳を軽々とかわし、青年が一步踏み込む。繰り出された膝蹴りを踏み台にするかのように足を乗せ、青年はデリックの膝を足掛かりに跳躍すると同時に、もう一方の足を持ち上げてデリックの顎に膝蹴りを返した。予想していなかった青年の行動に、デリックの反応が遅れた。

瞬間、骨の碎ける音が辺りに響き渡り、デリックの身体が仰向け

に倒れる。受け身も取れずに後頭部から地面に激突し、昏倒したデリックを青年が見下ろす。

……あいつ、躊躇せず……？

普段、スラッグがデリックの相手をする場合、攻撃を全てかわした上で下腹部や脇腹などに攻撃を集中させて気絶、もしくは戦闘続行不可能な状態にまで持っていく。面倒事を増やしたくないと思うせいだろう、致命傷にもなりかねない場所への攻撃は避けているのだ。しかし、目の前の青年は致命傷になりかねない衝撃を躊躇無く与え、一撃でデリックを下した。

「自業自得だ。暫く病院で反省しろ」

つまらなさそうに言い、青年が歩き出す。

周りではデリックを道路上から運び出す作業が行われ初め、青年の存在を気にする者が急速に減っていく。救急隊が到着し、デリックを回収し、警察達がやってくる中、恐らくは警察に事情聴取を迫られるだろう青年はそんな事を気にした風もなくその場から去ろうとしていた。周囲に人が多いため、一度姿を眩ませればほとんど見つかる事はない。

「ん……？」

近くを通ろうとした青年の視線がスラッグと合った。瞬間、青年の目が見開かれる。

「お前……!!」

駆け寄ってくる青年に、スラッグもレイシエもその場から動く事ができなかった。無視しようとしても、どの道二人に青年が関わってくるだとうと青年の表情から解ったからだ。

「な、何だ……？」

「あなた、凄いのね……!!」

うるたえるスラッグとは反対に、レイシエはにこやかに話し掛けていた。

「君は……!! 君もか!!」

「え？」

青年がレイシエを見て口走る。

その意味が解らず、スラッグもレイシエも首を傾げた。

「君達と話がしたい。落ち着いて話せる場所はないか？」

「私達の家ならず近くだけだ」

「連れてつてくれ。重要な話なんだ」

青年の言葉にレイシエが応じ、彼をスラッグ達の家以案内する事がすぐさま決まってしまった。

スラッグとしては素性の知れない相手を家に入れるなど反対だったのだが、それを主張する間もなくレイシエが応対してしまったのだ。もつとも、スラッグ自身も青年の話に興味がないわけではなかったのだが。彼が纏う異質な空気に、スラッグは惹かれていたのかもしれない。

一階のリビング部分のソファに腰を下ろし、スラッグは青年と向かい合っていた。

「俺の名前はトウージ・アンジエ・ヴァリウス。アンジエと呼んでくれ」

青年はそう名乗った。

「私はレイシエ・ラン・セート」

レイシエが言い、アンジエはそれに頷くと視線をスラッグへ向けた。

「君は？」

「スラッグ」

「フルネームが知りたいんだ」

普段呼ばれている愛称を答えたスラッグに、アンジエは真剣な眼差しで言った。

「……スルーゲイル・ドラグ・リュージョン」

「ドラグ、か……ふむ、解った」

ミドルネームを改めて呟き、アンジエは頷いた。

左右で目の色が違う、もしくは両目とも目の色が通常のものとは

異なる場合、ミドルネームを付けるのが風習となっている。そのため、レイシエの両親の名前にミドルネームはなく、スラッグの両親の名前も同様であった。

「普段はスラッグでいい」

スラッグ自身、正式な名前のスルーゲイルと呼ばれるよりも、愛称として略された呼び名の方が気に入っていた。

「それで、話っているのは？」

不信感を抑えつつ、スラッグは問う。

「 外の世界を見たくないか？」

身を乗り出し、口元に笑みを浮かべながら、アンジエは確かにそう言った。

「外……？」

眉根を寄せ、スラッグは首をかしげた。

外界にならハントの時にいつも出ている。アンジエの言葉の意味が解らなかった。

「本当の世界の事さ。ここは、上手くカモフラージュされてるが、閉鎖空間だ。そこから出てみたくはないか？」

「どついう事？」

アンジエの言葉に、レイシエが聞き返す。

「この世界はジオ・フロント内の空間なんだよ」

「馬鹿言え、海や島だってあるんだぞ？ それに、空だってある」  
その言葉にスラッグは口を挟んだ。

地下空間ジオ・フロントであるのなら、維持の面からもそれほど大きなものは造れないだろう。だが、スラッグが住むこの世界には海があり、海外という場所が存在しているのだ。航空機も存在するし、船舶もある。ジオ・フロント内にそれらを置くには、凄まじいまでの空間が必要になる事は想像に難しくない。

更には、空だ。太陽の動きや月の動き、日照時間の差異は場所によって違うし、季節の変化も存在する。

今まで生きてきた世界が地下だったなど、スラッグには信じられ

ない言葉だ。

「それだけ巨大なジオ・フロントなんだから仕方ないだろう」

スラッグの問いにアンジエはさも当然と言うかのように答えた。

「そんなのが造れるのか？」

「造れたんだろう。じゃあ逆に聞くが、何故クリーチャー対策にジオ・フロントを造らない？」

アンジエが問い返す。

クリーチャー対策のためには外壁を造るよりも、地下に新たな生活空間を造った方が効率が良い、という者は少なからず存在している。しかし、費用や地盤の問題から地下空間の建造は見送られたままになっていった。

アンジエからすれば、ジオ・フロントを造らないのは、既にジオ・フロント内にいるからだというのだろう。これ以上地下には生活空間を築けるだけのスペースがない、というのがアンジエの見解なのだ。

「それで、ここがジオ・フロントだとして、あんたは何がしたいんだ？」

スラッグは話を切り替えた。

にわかにはアンジエの話を信用できない。だが、その話を否定し切れないのも事実だった。

「俺の目的は外に行くべき者を導く事だ」

「外に行くべき者？」

「この場だと、君達だ」

眉根を寄せるスラッグに、アンジエは告げる。

「君達は自分が他の人間達と違う事に気付いている。違うか？」

「それは……！」

アンジエの言葉は、今までの生活でスラッグが感じていた事そのものだ。間違っではない。

大気の流れを読める人間など、まずいない。ある種の武術などの修練によって、周囲の気配を呼んだり、戦闘技術の訓練によって感

覚を鍛える事はできたとしても、スラッグと同質の勘を持つ者はいないだろう。訓練などしたわけではなく、スラッグの感覚は生まれつきだったのだから。

それだけではない。多少は身体を鍛えたが、同じ量のトレーニングを積んだ同年代の人間と比べて、スラッグとレイシエの身体能力は必ず抜けて高いのだ。スラッグと同じ年でハンターをしている人間は数えるほどしかないだろう。

目の色といい、身体能力といい、スラッグとレイシエは人間離れしていると言われたとしても否定できない。

「俺も同種だね」

アンジエが口元に笑みを浮かべて言う。

「時折、ジオ・フロント内でも特殊な人間が生まれる事がある。それらを本来あるべき場所へ導くのが今の俺の役目だ」

その言葉を並べたアンジエの声は、自分の行動に誇りを持っている者の声だった。自信に満ち溢れ、正しいと確信しているのだ。

「共に行かないか？」

アンジエの言葉に、スラッグは直ぐに返答できなかった。

「外の世界……私は見てみたいな」

目を輝かせ、レイシエが言う。

「君はどうだ？」

「……少し、考えたい」

アンジエの誘いに、スラッグはそう答えた。

俺は、あんたの話を鵜呑みにはできない。

その言葉は飲み込んだ。頭ではアンジエの言う話を全て信用していないというのに、何故かアンジエの言葉が事実だと思い始めている自分がいる。

「良い返事を期待してるよ」

微笑んで応対するアンジエから、スラッグは目を逸らしていた。

「そついえば、今夜はどうするんですか？」

「近くにホテルでもあれば楽なだけだね」

「良かったらウチに泊まりませんか？」

「いいのかい？」

「ソファに寝てもらう事になりますけど、朝食は付きますよ」

目の前で交わされる会話に、スラッグは口を挟もうとしなかった。基本的に、レイシエは誰にでも優しい。先の騒動に首を突っ込もうとするのも、スラッグと同棲しているのも、レイシエの性格によるところが大きいだろう。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな」

笑顔でレイシエに対応するアンジエ。

「俺、先に寝るよ」

「もう寝るの？ ちょっと早いんじゃない？」

大きく溜め息をつき、ソファから立ち上がったスラッグにレイシエが言う。

「一人で考えたいんだ」

レイシエに答え、スラッグは階段を上り、二階にある自分の部屋に入った。

テレビとゲーム機、机と小さな本棚、クローゼットとベッド。

スラッグは後ろ髪を束ねていた紐を解いた。その紐を上着のポケットに突っ込み、ベッドの上に仰向けに寝転がる。

外へ出るというのであれば、少なくとも街を出る事になる。家を引き払い、家具を処分して、寝袋などの旅支度も整えて、街を出る。普通の世界にしか見えないこの場所から、どうやって外に出るのかは解らない。ただ、アンジエの言葉を信じるのであれば、アンジエは外に出る方法を知っている。そうでなければ、アンジエ自身の存在が矛盾してしまうのだから。

物音を立てずに部屋にいと、階下からの声が微かに聞こえてくる。レイシエの声と、アンジエの声。雰囲気から察するに、他愛のない事を喋っているのだろう。重要な事ならば、スラッグを引き止めてレイシエと共にいる時に一度に喋ってしまった方が楽だからだ。レイシエは恐らくアンジエについて行くだろう。例え今の生活に

戻れなくなつたとしても、レイシエは外を見るといふ事を諦めはしない。今生きている世界がジオ・フロントなのだとすれば、本当の、外の世界はレイシエにとつては『果てのない世界』なのだ。もしかしたら、レイシエはこの世界に果てがあるという事を心のどこかで感じていたのかもしれない。

俺は……。

世界に果てがある。その考えを、スラッグは心のどこかで否定したいと思っている。今まで生きてきた世界を捨て、見知らぬ世界に行こうとする事に抵抗を感じているのだ。

まだやり残したゲームもある。見たいテレビ番組もある。

そんな事をアンジエに言えば笑われるかもしれない。もし、アンジエが外の世界から来たのだとしたら、ここにあるゲームも、テレビも、興味の対象外のはずだ。暇潰しに見る事はあっても、本来の目的を進められるのであればそちらを簡単に優先できる。

甘えだよな、そんなの。

生きていく事に差し支えがないのであれば、そこで一生を終えた方がいい。その考えに間違いはないだろうし、冒険する事が間違っているわけでもない。

外の世界が本当にあるのなら、見てみたい。

それもスラッグの本心だ。ジオ・フロント内の風ではない、本当の風を感じてみたい。

スラッグはレイシエと違い、アンジエを完全に信用してはいないのだ。アンジエが何らかの目的でスラッグ達を騙そうとしている可能性もゼロではないのだから。

だが、アンジエが纏っていた空気は確かに異質なものだった。今まで触れた事のない感触の風。全体的に纏っていたわけではなく、微かに残っていたかのように、アンジエの衣服に纏わりついていた空気。

「……俺が、外へ行く理由……」

それがあるだろうか。必要性はない。ただ、迷っているという事

が、スラッグに理由を考えさせているのだ。  
更けていく夜に、スラッグは延々と考えを廻らせていた。

朝、いつも開け放している部屋の窓から入ってきた風に、スラッグは目を覚ました。

「……何だ？」

まず初めに感じたのは違和感だった。また壁の外で何か起きたか、起きようとしているのだろうか。

ベッドから降り、着替えを済ませて後ろ髪を束ね、一階へと下りる。

「よお、早いな」

「昨日早く寝たからな」

部屋のソファから身を起こしたアンジエの声に、スラッグは答えた。

「眠れたか？」

「まあな。寝心地は悪くなかった」

スラッグの言葉に答え、アンジエがソファから下りた。レイシエが渡したのであるう薄地の掛け布団を二度折り畳んでからソファの背もたれにかける。

「朝食は君が作るのか？」

「三十分ぐらい待ってればレイシエの作ったものが食べられるけど？」

アンジエの問いに答え、スラッグは手早く朝食を用意して行く。

フライパンに油を垂らし、軽く熱し、トースターにパンを突っ込み卵とベーコンを冷蔵庫から取り出す。

「いや、君ので構わない」

背後から掛けられた言葉に、スラッグはパンをもう一枚トースターに押し込んだ。

フライパンの上で片手で卵を割り、既に細かく刻まれているベーコンを散らす。手早く掻き混ぜながらフライパンを動かし、スクラ

ンブルエッグを作った。皿に盛る際に塩コシヨウを軽く降りかける。「できたぞ」

「手際がいいな」

アンジエを呼び、テーブルに座って食事を始めた。

「てつきり役割分担がされていると思つてたが、そうでもないようだな？」

「一人暮らしできるだけの技術は一通り持つてる」

トーストにマーガリンを塗りながら、スラッグは答えた。

一人きり生き残った時、スラッグは一人暮らしを覚悟していた。

レイシエが同棲する事になったとはいえ、いつスラッグ一人になるかは解らない。一通り生き残れるだけの技術はスラッグも習得しているのだ。

「それで、決まつたか？」

少しだけ声量を落とし、アンジエが問う。

「……俺も行く」

静かに、だがはつきりと、スラッグは答えた。

アンジエが口元に笑みを浮かべたのがスラッグにもはつきりと見えた。

そうして、レイシエが朝食を終えてから、アンジエが今後の予定を話題にした。外へ行くと決めたのであれば、直ぐにでもジオ・フロントから脱出した方が良いのだと言い、今日中に旅立つ事が決まった。

持つて行くものとそうでないものを整理し、それが終わり次第、スラッグとレイシエの家を引き払って旅立つ事になった。元々、それ程の衣服を持っていなかったスラッグは必要だと思つた衣類をやや大きめのバッグに詰め込み、持っていたゲームを全て売り払つた。レイシエはスラッグに比べ衣服が多いため、ある程度選んだらしい。レイシエもお気に入りの数冊を残して本を全て売り払い、準備を済ませた。

「……忘れものはないな？」

「うん」

アンジエの確認に、レイシエが頷く。

「！」

家を出た瞬間、スラッグの背筋に悪寒が走った。寒気のような感覚は、スラッグが風から感じ取ったものだ。それが解ったからこそ、スラッグは風上へと視線を向けていた。

「どうしたの？」

「……何か、来る！」

その様子に首を傾げたレイシエに、スラッグは表情を強張らせ、告げた。

何だ、この厭な風は……！

凄まじいまでの恐怖を感じた。とてつもなく強大な何か、向かってくると、そう風が告げている。

「ねえ、一体何が……！」

レイシエが呟いた瞬間、その場に『声』が届いた。禍々しい、叫び声。咆哮。

瞬時に街が静まり返り、やがてざわめき、パニックに陥って行く。

「……レベルスリー……」

アンジエが呟いた。

風上、スラッグの正面に見える壁が、突如崩壊した。外側から突撃してきた『それ』を抑え切れずに、内側へと壁の破片を撒き散らしながら、外壁が崩壊する。

十メートルを越えるであろう、大きな漆黒の身体に二枚の巨大な翼を生やした、クリーチャー。まるで竜を思わせる姿をしたクリーチャーに、人々が逃げ惑う。

スラッグが感じ取った風を起こしていたのは、間違いなくその竜だった。凄まじいまでの存在感と、威圧感に、スラッグ自身も勝ち目はないだろうと確信していた。恐らく、人間の力では目の前のクリーチャーを倒す事はできない。都市数個分の軍事力を結集してようやく仕留められるであろう規模だ。

壁を崩し、大きな二本の足で建物を押し潰し、着地する竜。

「！」  
空に向かって咆哮し、口腔内から炎を吐き出す。灼熱の業火に街が燃やされて行く。

街の端の方で赤々と燃え盛る炎と、黒煙の向こうで咆哮する竜が、辺りを見回すかのようにその首を曲げる。遅れてやってきた熱気が突風となってスラッグ達にぶつかり、通過した。

「……まずいな」

アンジエが呟いた。

クリーチャーには大きく分けて三つのタイプがある。最も一般的で、ハントの対象とされるのが四足歩行の獣型クリーチャーだが、他にも二種類のクリーチャーがいるのだ。一つは人間の四倍程の大きさの二足歩行型のクリーチャー。そして最後が最も巨大な竜型のクリーチャーである。獣型、巨人型、竜型の順に戦闘能力は高くなるが、その度合いは半端なものではない。獣型は通常の間人が二、三人で狩るのが普通だが、巨人型は十人程度で十分に畏を張り相手にするのが基本だ。しかし、竜型の場合は、生身の人間が戦って勝てるような相手ではない。

竜型クリーチャーに襲われた都市で、撃退できたところは数えるほどしかなく、それでも壊滅的な打撃を被っている。

「どうしよう、このままじゃ街が！」

レイシエの表情には恐怖と困惑があった。

勝ち目がない事は理解しているのに、放置できないのだ。二度と戻ってくる事がない街となっているとしても、見過ごせないのである。

「どうにもできないよ、俺達じゃ……」

歯噛みして、スラッグは答えた。

風を読めたとしても、攻撃の規模が竜型ともなるとスラッグでも避け切れない。当然だが、スラッグとレイシエは竜型と戦った経験もない。少しだけ他の人間より身体能力が優れていたとしても、普

通の人間と同じ武器に頼らなければ戦えないのだ。その武器が通用しないとなれば、スラッグ達にも勝ち目はない。

「果たして、そうかな？」

「……え？」

アンジエの言葉に、スラッグは耳を疑った。

「俺達なら、勝てる」

自身に満ちた声で言い切るアンジエに、スラッグもレイシエも言葉を返せなかった。

「二人はまだ、覚醒してないだけだ」

「何を言って……？」

「俺達の中には力が眠っている」

困惑するスラッグに、アンジエはあくまでも冷静に言葉を紡いでいた。

「あなたは、あれを倒せるの……？」

レイシエが問う。

間違いなくレイシエも困惑している。だが、街を救えるかもしれないという可能性に、理解できずにただ悩むよりも期待を抱いている。

その問いにアンジエは頷いた。荷物をレイシエに預け、竜へと歩き出すアンジエは、振り向かずに告げた。

「外では、俺達は自分達をこう呼んでいる」

凄まじいまでの大気の流れがアンジエを中心に巻き起こる。そのアンジエの背中に、何かが形作られていくのを、スラッグは確かに見た。

ヴァーテクス。

## 第二章 「ヴァーテクス」

### 第二章 「ヴァーテクス」

アンジエは歩き出す。自らの力を解放し、背中にその象徴たる白き翼を生やして。

前方に見えるクリーチャーがアンジエに反応した。凄まじいまでのエネルギーを発しているアンジエに気付いたのだ。いや、気付くようにできていると言うべきか。

ゆっくりとアンジエに頭を向ける竜に、変わらぬ速度で歩き続けていたアンジエが立ち止まる。

息を吸い込むかのように熱気を体内に蓄え、圧縮し、口腔をバレルとして放出する。竜型クリーチャーの初歩的な攻撃手段だ。その一連の準備動作をしている間に、アンジエは立ち位置を調整していた。

両足を肩幅に開き、身体の正面をクリーチャーに向ける。

「フレイルム・サークル」

竜が口を開け、灼熱の炎を吐き出す瞬間、両手を前方に突き出し、アンジエは告げた。やや左右に開いた両腕を、右手は空気を掬い上げるように持ち上げて上半分の円を描き、左手は空気を押し潰すかのように下半分の円を描く。

その過程で両腕に力を集約させ、熱気を纏わせていき、円を描いた直後に、その逆の動きでもう一度円を描く。陽炎が周囲に振り撒かれ、熱風を起こす。そして、その瞬間に熱気を前面に放出し、真紅の炎を巻き起こした。

円形に固定させたアンジエの炎と、竜の吐き出した炎が接触する。その一瞬に、円を形作っていた炎が、その半径を増すように周囲に拡散して破裂した。赤々と燃え盛る炎がアンジエの前髪を弄り、衣服をはためかせる。竜の吐き出した炎をも取り込み、その場に炎を

押し留めて周囲に散らす。そうする事で、アンジエが作り出した炎の輪から先へ竜の吐き出す炎を透過させず、自らをも守る。

突撃してきた者には反撃を、遠距離攻撃に対しては盾となる、それがアンジエの炎の輪だ。

「まあ、丁度良い機会でもあるか」

小さく呟き、アンジエは地を蹴った。

たとえ背中に生えた翼が実体ではないものだとしても、数千度の熱量を翼に集めれば実態として十分な物理的エネルギーを持てる。赤く燃え上がった翼が熱気と共に大気を地面に押し付け、アンジエの身体を持ち上げる。自らが放出する熱を周囲の待機に撒き散らし、それを操る事でも身体を持ち上げた。

陽炎を纏い、ゆっくりと高度を上げるアンジエに、竜がゆっくりと歩き出す。翼を動かし、自らも身体を宙に浮かべ、アンジエへと口を開けた。

「……本物の炎を見せてやる」

呟き、アンジエは右手を引いた。その右手に熱気を集約させる。

陽炎を通り越し、淡く光を帯びる腕に、更に力を集めていく。

「フレイム・ジャベリン」

左手を引き、右手を押し出す。半身になっていた身体の前後を入れ替えると同時に、熱気を前方へと射出。

真紅以上に温度を高められた炎は、白熱した光へと収束し、周囲の水蒸気を蒸発させ渦を巻くように風を起こし、一直線に飛んで行く。竜が口腔から放出した炎を、白い業火は纏う風で振り払い、打ち消した。そうして、白い炎が竜の身体に触れた瞬間、竜の身体を溶かし、体内に侵入して行く。

伸ばした右手の掌をゆっくりと顔の前に戻していたアンジエは、白炎が竜の体内に潜り込んだのを見て、掌を握り締めた。

そして、それを合図にして炎の槍として収束させていた熱量を周囲に解き放つ。爆発的な熱量によって竜の体内の空気が膨張し、クーリーチャーの身体が膨れ上がる。膨張した空気内の水蒸気と体内の

水分が一瞬にして蒸発し、水蒸気爆発を起こす。更には熱量自体が内側からクリーチャーの身体を焼き尽くし、圧迫する。その全てのエネルギーが一瞬にして竜の体内で増幅し、一瞬にして爆発を起こした。

内側から破裂した竜の肉片と体液が周囲に飛び散る中、アンジエの身に降り掛かるものは全て身体の数メートル先で蒸発していた。

「……こんなところか」

呟き、アンジエはゆっくりと高度を下げ、両足を地面に着けた。

\*

ヴァーテクス。アンジエの口から放たれた、アンジエとスラッグ、そしてレイシエのような人間達を指す言葉。その力を目の当たりにしたスラッグは、その光景に啞然としていた。

軍隊とも呼べる規模の人数と兵器が無ければ勝ち目がないとされていた竜型クリーチャーを、その攻撃をいとも簡単に防ぎ、たった一発の攻撃で葬ったのだ。

「す、凄い……」

レイシエはそう呟いたが、そんな程度のものではない事は明らかだった。

一般的な言葉を使えば、アンジエは「人間ではなかった」のだから。

同時に、それはスラッグとレイシエを指す言葉でもある事に、スラッグは動揺していた。スラッグの中にもアンジエのような凄まじい力が眠っているというのだ。無論、レイシエにも。

熱気と共に感じた風は、スラッグにその力を鮮明に感じさせた。背に生やした翼が消え、アンジエが振り返る。何事もなかったかのように歩いてくる様子を見て、今の戦いが本気のものではなかった事を知った。

「さてと、ゆっくりもしてられない。直ぐにここを発つぞ」

言い、アンジエはレイシエが抱えていた荷物を拾い上げ、立ち止まらずにスラッグとすれ違った。

「ねえ、今の、何……？」

レイシエが問いを放つ。その問いはアンジエでなければ答えられない。

「あれがヴァーテクスを持つ力だ」

言い、歩みを進めるアンジエに、二人は一度顔を見合わせてから後を追った。

先程の戦闘を見ていたのであろう人達は道を開ける。奇異と恐怖の混在する視線がアンジエに向けられていたが、アンジエ自身はそれに何も感じた様子はなく、ただ歩いていった。それを追うスラッグはその視線に気分を害したものだだったが。

やがて、三人は都市間交易の際に使われている駅に辿り着いていた。都市間の通路を徒歩で進む事も不可能ではないが、時間もかかる上に、危険でもある。列車で移動すれば時間も労力も少なくて済む、そういう事だ。丁度、街から発車しようとしていた列車に乗り、二人ずつ向かい合う座席に座った。スラッグとレイシエが並んで座り、アンジエが向かいに、荷物を隣にまとめて置いて座っていた。三人がいる列車には他に人影はなかった。

ジオ・フロントの外に出るには、スラッグ達が住んでいた街から二つほど外側の都市に移動しなければならぬらしい。最も外側にある都市に着いてから、都市から外へと出て、ジオ・フロントの外へ続く道に向かうのだそうだ。

「ヴァーテクスはそれぞれ異なる力を宿している」

列車が発進した辺りで、アンジエが口を開いた。

「異なる？」

「俺の場合はたまたま炎が使えるようになったが、君達二人も炎だとは限らないという事だ」

スラッグの言葉に、アンジエは頷く。

「外では十歳になる前に力は発現させる。外ではその力が生きる事

自体に関わるものだからな、力を司る深層意識を引き出しやすい傾向にあるようだ」

ただ、と一度区切り、アンジエはスラッグ達を交互に見やる。

「地下では力を使わずとも暮らしていけるようだからな、発現し難いらしい」

「力の発現で、どうやるの？」

「明確にそれだと言えるような方法はないが、確実性が高いのは戦闘だな」

レイシエの質問に、アンジエは言った。

実戦に一人か、もしくは少数を放り込み、緊張感を極限まで高めさせると同時に、生きたいという意志を強く持たせる事で力を発現し易くするのだそうだ。極限状態におく、というのは簡単だが効果的でもあるのだろう。

「力を統制するのは本人の意思だからな、その人物の性格からもある程度は力の予測が立つ。戦闘向きではないのならば、また別の方法をすればいい」

「俺達も、覚醒させるのか？」

「無理にそうする必要はないな。恐らく、外に出るには必然的に力が必要になる」

スラッグの言葉に、アンジエが言う。

それは、スラッグやレイシエも力を使う必要があるという事だ。

つまりは、この先、スラッグ達が戦わなければならない場面が出てくるとい事である。

「なあ、覚醒した時って、どうなんだ？」

「……怖いかな？」

そのスラッグの問いに、アンジエは口元に笑みを浮かべて言う。

「……そりゃあ、少しは」

正直、スラッグ自身は力というものが自体が把握できていない。話を聞いただけではイメージするのも難しいだろうし、実際に体感した方が解り易いのは明白だが、覚醒する事に不安があるのも事実な

のだ。

スラッグの中に眠る力がどんなものかも解らない。攻撃的なものだったとして、制御不能にはならないのか、覚醒時にはどのように力が発現するのか、どのように力を使えばいいのか。

「心配ない。気付いた時には使えているというのがほとんどだ。その時にも、ちゃんと理解できる」

アンジエが言う。少なくともアンジエはそうだったのだろう。だが、だからといってスラッグやレイシエも同じだとは言えない。特に、スラッグとレイシエが、外から来たというアンジエと同じように行くかどうかは解らないのだ。もつとも、他に判断材料になる情報もないのだから、アンジエの言葉を信用しておく以外に手はないのだが。

「ねえ、私の力って何だと思う？」

スラッグとは対照的に、レイシエは期待も抱いているらしい。常に前向きなのはレイシエの良いところでもあるのだが。

「そうだな……目の色から判断するには『水』かな？」

「水？」

「赤が炎だとしたら、その反対は水じゃないか？」

半ば冗談気味に、アンジエは言った。

「目の色が関係あるのか？」

「確実に関係があるとは言えないが、その傾向はあるらしい」

スラッグの問いにアンジエは頷いた。

「少なくとも、ヴァーテクスの中に両目とも常人と同じ色を持っている者はいない。目の色が違うというのはヴァーテクスの証だとも言えるな」

それがスラッグ達をヴァーテクスだと判断した理由なのだろう。アンジエがスラッグ達を誘ったのも、最初に目線が合った時にヴァーテクスだと解ったためだ。目の色が違う、ヴァーテクスであると判断できたからこそ、アンジエはスラッグ達を促したに違いない。「じゃあ、スラッグは何だろうね？」

「さ、さあ……？」

レイシエが顔を覗き込んで問うが、スラッグは苦笑して肩を竦めた。

実際に覚醒してみなければ解らないと言つのもあるが、スラッグは余力に対しての興味はなかった。確かに、自分の中に眠る力が何であるのかは気になるところもあるが、それよりもスラッグには気がかりになっていた事があつた。

「そういえば、外に出られるんなら何で全員が外に出ないんだ？」

外の世界があるのならば、わざわざジオ・フロントで生活する必要はない。クリーチャーなどという存在がいるジオ・フロントよりも、本来の地上の方が生活空間のはずなのだ。それをしない、いや、そんな世界になっていないという事は逆に不自然でもある。

「それは簡単な事だ。ヴァーテクス以外の人間には環境が厳し過ぎる」

「俺達だって普段は他の人間と変わらないだろ？」

アンジエの言葉に、スラッグは言う。

力を使えると言つても、それは戦闘能力に関してのみであつて、普段の生活はヴァーテクスではない人間でも変わらないはずだ。現に、スラッグ達はヴァーテクスだとアンジエに言われているが、他の人間達と変わらぬ生活をしてきた。他の人間達が死滅してしまうような環境なのであれば、ヴァーテクスと言えど生き残る事はできないだろう。

「そういう意味じゃない」

そのスラッグの反論にアンジエは首を横に振った。

「野生動物がクリーチャー以上の戦闘能力を持っているんだ。クリーチャーをまともに倒せないような人間達では地上では暮らせないさ」

「じゃあ、ヴァーテクスと共同生活とかはできないのか？」

スラッグ達が暮らしてきた都市では、ハンターや自警団などがクリーチャー退治をこなし、街を守ってきた。それと同じように、志

願したヴァーテクスが生活区域を守り、その中で戦いを好まない者達や普通の人間が生活する事も可能なはずだ。そうすれば、ジオ・フロントは必要なくなる。

「……君は他の人間達からヴァーテクスがどう見られるか想像できないのか？」

アンジエの言葉に、スラッグははっとした。

先程、アンジエが力を使って戦っていた時にスラッグ自身も考えていた事だ。普通の人間から見れば、アンジエは既に人間の領域を超えている。当然、気味悪がって嫌う者も多数出てくる事だろう。

集団の中に他のものとは明らかに異なる個体が現れた時、集団は異物を排斥するものだ。

共存できると思う者がいる限り、それは不可能ではないが、そう思わない者が数多くいるからこそ困難を極める。

「それに、場合によっては、俺達ヴァーテクスでも勝てない生物だっているんだ」

アンジエの言葉に、スラッグは頷くしかなかった。

「力が使えるからって楽じゃないんだよな」

言い、アンジエが列車の窓を開けた。

「うっ！」

流れ込んできた風に、スラッグは思わず声を上げていた。

「どうしたの？」

レイシエとアンジエがスラッグを見る。

「厭な風だ……」

自分でも少し声が震えているのが解った。風が肌に触れた瞬間に、全身が粟立つような不快感を感じた。

「……風？」

アンジエが窓を全開にし、列車が向かう前方へと視線を走らせる。外壁で覆われた交易路の中で空気の流れがあるとすれば、それはスラッグ達が出てきた街か、向かう街から流れてきたものという事になる。

「……明かり？」

アンジエの眩きに、スラッグとレイシエも窓から前方を眺めようとした。

確かに、前方が明るくなっているのが見える。だが、交易路としての出口が近いのであればそれは当然の事だ。

スラッグが感じたのはその出口から流れ込んでいる空気に間違いない。

「炎の明かりか……！」

表情を真剣なものに変え、アンジエが呟いた。

「え？」

「あれは火の明かりだ。俺には解る」

レイシエが首を傾げるのに、アンジエは言った。

ヴァーテクスのかとして炎を操るアンジエは火といものに関して敏感なのだろう。炎が放つ光と、そうでない光の見分けができるというのだ。

「火事って事？」

「そんな生易しいものじゃない」

一人だけ状況に疎いレイシエに、スラッグは言った。

ただの火事で感じるような風ではない。もつと、凶悪な何かがあるという事を風が教えてくれていた。

「……荷物はしっかり持ってるよ」

アンジエの言葉に、スラッグは頷いた。

列車が急速に速度を落としていく。減速が生み出す慣性に手足を座席などに踏ん張って耐え、列車が止まるのを待った。

「まだ都市内に入ってないわよね？」

「先に行くのが危険だと解ったんだらうな」

レイシエの問いにアンジエが答え、列車のドアを手動で開け放つ。既に徒歩でも直ぐに街を抜けられるだけの距離にまで近付いていた。交易路自体は列車のためだけに作られているわけではなく、線路の幅以上にも、余分にスペースが取られている。非常時には徒歩で

も移動できるようになっているのだ。

もつとも、そうして列車が急停止した際に躊躇う事なく手動でドアを開けて外に出る者はそういないだろうか。

「どこに行くんだ？」

「邪魔があるなら排除する必要があるだろう」

スラッグの言葉にアンジエは言い、列車が今まで向かっていた方向へと歩き出している。

レイシエがそれを追いかけて駆け出し、一瞬遅れてスラッグも後を追った。

障害になるものを排除する。その一言はアンジエが自分の力でこの場を切り抜かれると確信しているからこそ言えた言葉だ。確かに、竜型のクリーチャーを一撃で葬るだけの力はあるのだが、過信しているのではないかともスラッグは思う。

「！」

交易路を抜けた先、街に入ってスラッグの目に飛び込んできたのは悪夢のような光景だった。

街が燃えていた。辺りは赤々と炎を上げ、熱風が吹き荒れ、黒煙が空を多い、火の光を遮ってさながら夜のようだ。崩れ落ちる建造物、煙や炎から逃れようと走り回る人々。逃げ惑い、炎に行く手を遮られて来た道を引き返し、またも炎で遮られる。炎に包まれた建造物の破片が落下し、それに押し潰される人。爆発的に火力を増した炎の近くを通り掛かり、火が移って転げまわる者。辺りから聞こえる悲鳴。

風はスラッグにそれらを教えていた。

そして、絶えず感じる不快感の原因は空にあった。

竜型のクリーチャーが五体、空中を飛び交い、炎を撒き散らしている。

「荷物を頼む」

言い、アンジエが走り出す。

その背中に一対の白い光が伸び、翼を形成した。飛翔し、クリー

チャーと戦おうとするアンジエは、街の住人の視線など気にする事もなく高度を上げ、自らクリーチャーの目の前に飛び出していく。その光景が自分達にも可能なのだという事に、スラッグは複雑な心境だった。

「……スラッグ、私達にも何かできないかな？」

隣でレイシエが呟くのに、スラッグは答える事ができなかった。力に目覚めれば加勢する事など容易いのだろうが、そもそも覚醒するという事自体が曖昧な事象に過ぎない。

アンジエが力を振るい、戦える事からも、スラッグ達が加勢できる可能性はゼロではない。戦いの中で覚醒させるとも、アンジエは言っていたのだ。だが、相手はクリーチャーとしては最強だと言われているタイプのものが五体だ。今までハントを経験してきたスラッグにとって、竜型クリーチャーは手も足も出ない事が解っている。

「……私、街の皆を交易路の方に誘導してくる！」

「レイシエ？」

「それぐらいなら私達でもできるでしょ？」

言い、レイシエは荷物を交易路の端に置くと街中へと駆け出して行く。

「……くそっ」

小さく毒づき、スラッグも荷物を置いて走り出した。

レイシエ一人で行かせるのは危険だと思った。ただでさえ辺りには危険に満ち溢れた空気が溢れているというのに、レイシエはその空気が一層濃い場所へ向かっていくのだ。せめて周囲の動きの変化を先に読み取れるスラッグがいなければ二人とも危険だ。

肌に纏わりつく熱気と不快な風を無視し、スラッグはレイシエを追う。

叫び、必死に誘導しようとするレイシエに、人々は耳を貸そうとしない。余裕がないのだ。そのために周囲の喧騒だけしか耳に入らない。その喧騒に押し潰されるレイシエの言葉は通らない。

「レイシエー！」

名を呼び、駆け寄る。

「……スラッグ、火が……」

「解ってる、皆パニックになってるんだよ」

泣きそうな顔をするレイシエに言い、スラッグは周囲を見回す。

右往左往する人達の中、人の流れに弾き出されるかのようにして小さな子供が脇に突き飛ばされた。まだ十歳に満たないだろう、小さな子供には目もくれず、周りの人間達は自分達が逃げられる場所を探している。

「！ やばいつ！」

不意に感じた風に、スラッグは空を見上げた。

上空で翼をはためかせて滞空するクリーチャーは、確かにスラッグ達に視線を向けているように見えた。その口がゆっくりと開いて行く。

「！」

瞬間、レイシエが飛び出した。

子供の前に立つ。両手を左右に精一杯に広げて、まるで自分を盾にするかのように。その横顔には恐怖と、それでも諦めない強い意志があった。一瞬、炎に照らされたレイシエの右目が青い光を反射する。

クリーチャーの口から吐き出された炎は熱風を巻き起こし、レイシエへと放たれる。渦を巻くように赤々と燃え盛る炎の奔流がレイシエを包み込んだ。

その刹那、スラッグは清涼な風を確かに感じた。

炎が途切れた時、そこには変わらずに立つレイシエがいた。背後の子供も無事で、周囲の人間達が立ち止まる。

レイシエの背には実体のない白い翼が生え、辺りに周囲に湯気が立っていた。

「……ヴァーテクス」

思わず、スラッグは呟いていた。

レイシエが覚醒した。それしか考えられなくなっていた。

竜が再度口を開け、その口腔から炎を吐き出す。その炎の前で、レイシエが両手を前面にかざした。その瞬間、レイシエの目の前の空間に渦を巻くように水が生成され、盾を作り出す。炎はその水の盾で押し留められ、水を蒸発させてエネルギーを使い果たし、消滅して行く。

レイシエがその両手を竜へと向けた。直後、盾となっていた水が弾かれたように竜へと向かって行く。その水球を身体に浴びた竜がよろめいた。

威力が足りないのだ。だが、それに気付いたのだろう、レイシエは高圧の水流を手から放ち、クリーチャーの硬質な身体を貫いた。

ほんの数秒の出来事に、誰もが動きを止めていた。

レイシエは自分の両手を見て、ゆっくりと周囲を見回した。燃え盛る炎に、作り出した水を撒き散らして鎮火させていく。自分のできる事を判断し、直ぐさま実行に移す。

スラッグでさえ、レイシエに近寄りたいたいと感じていた。それと同時に、そう感じた自分に嫌悪する。

「……レイシエ！」

半ば強引に身体を歩かせ、スラッグはレイシエに駆け寄った。

「あはは……覚醒しちゃったみたい」

乾いた笑みを浮かべて言うレイシエに、スラッグは引き攣った笑みを返す事しかできなかった。

周りの視線が集まっている事に、スラッグは警戒心を抱いた。レイシエの後ろにいた子供は呆然とした表情でレイシエを見上げている。

「……！」

不意に、感じた風に背後を振り返ったスラッグの目に、クリーチャーが吹き飛ばされてくるのが移った。

周囲の建物をその身体で押し潰し、破壊しながらこちらへと転がってくる。自ら突撃してきたのではなく、明らかに何者かによって吹き飛ばされたような姿勢だった。無論、そんな事ができるのはア

ンジエぐらいしかない。

見た目以上の機敏さで起き上がった竜型クリーチャーが後ずさりし、やがて背後のスラッグ達や人だかりに気付き、身体の向きを変える。それを見た人々が悲鳴を上げて逃げ惑うが、スラッグとレイシエだけはその場に留まっていた。背後の子供も逃げる素振りを見せない。

「スラッグ、その子を安全な場所まで連れてってあげて」

「……解った」

レイシエの言葉に、背後の子供を抱え上げて駆け出した。

悔しいが、スラッグにはレイシエの力になつてやる事ができない。自分の力に覚醒していればそれも不可能ではないのだろうが、覚醒するかどうか解らない状況ではレイシエに任せた方が確実だ。せめて、レイシエが力を発揮しやすいように子供を避難させる事ぐらいしかできなかった。

走りながら後ろを見やれば、竜が吐き出した炎をレイシエが水を生み出して防いでいた。

「……おい、俺の言葉が解るか？」

「え……？」

抱えた子供に声をかけ、反応がある事を確認してスラッグはその子を地面に下ろした。

「せめてお前ぐらいは生き延びろよ」

両肩に手を置き、言い聞かせるとスラッグは立ち上がる。

「……お兄ちゃんはどうするの？」

「俺は手助けしに行く」

か細い声での問いかけに、スラッグは声の主を見る事もせずに振り返り、駆け出した。

加勢できなくても、レイシエを放つてはおけない。スラッグはレイシエの元へと向かって、子供を抱えて走って来た道を逆走する。頭上高くを、白熱した炎が突き抜けていく。アンジエの攻撃だろう。単体の時と違っててこずっているのだろうか。

熱気で満たされた街の中を駆け抜け、角を曲がる。その向こうでレイシエがクリーチャーの首を、手から放った水圧で両断していた。崩れ落ちるクリーチャーを前に、肩で息をするレイシエに駆け寄る。「大丈夫か！」

「……うん、あの子は？」

「離れた場所まで連れて行った。大丈夫そうだった」

「そう……」

呼吸を整えつつ受け答えた、レイシエの足元がふらついた。

身体のバランスを崩したレイシエを、スラッグが受け止める。そのスラッグにしがみつくように、レイシエが荒い呼吸を整えていく。レイシエの纏った空気は何も変わらない。ただ、少しだけ良い匂いがした。

ヴァーテクスに覚醒し、力を使った事に関して、スラッグはレイシエに聞く事ができなかった。どんな感覚だったのか、どんな思いだったのか、知りたいと思いつつも、どこかに恐れがあったのかもしれない。それとも、自分だけが覚醒していないという状況になった事にコンプレックスを抱いたのかもしれない。

やがてレイシエが落ち着いたのを確認し、スラッグはレイシエから離れた。

「風は、どう？」

レイシエが問う。周囲の状況判断をスラッグの勘に頼っているのだ。

「……まだ、あんまり良い風じゃない」

少しだけ俯き、スラッグは言った。

相変わらず周囲に満ちている風は何か凶悪な肌触りのままだった。周囲のクリーチャーはもういないように思えたが、風はクリーチャーがまだ現れるであろう事を指し示している。

「覚醒したらしいな。おめでとう」

「あ、うん」

不意に目の前に舞い降りてきたアンジエに、レイシエは少し驚い

たように頷いた。

「とりあえずこの街を襲っていたクリーチャーは殲滅した。早く離れた方がいい」

アンジエの提案に二人は頷き、荷物を回収するとアンジエが先頭となって駆け出した。

ほぼ一直線に別の都市、スラッグ達にとっての針路へ向かうための交易路へと入る。列車は既になく、クリーチャーが襲ってきた初期の頃に避難民を乗せて次の都市へ向かったのだらう。

「ちよつと待つてろ」

言い、アンジエが道を引き返して行った。

暫くして、アンジエが小型のトラックを運転してきた。売り物だったものを失敬したのと言い、スラッグは荷台に荷物と共に乗り、レイシエを助手席に乗せた。本来ならば非常時の盗みは重罪なのだろうが、ジオ・フロントを脱出しようとしている事を考えれば、スラッグ達は地下世界で罪を負わされても困る事はない。それを解っているからこそ、アンジエは移動用の足を躊躇せずに失敬したのだらう。

「……それにしても、大変だったわね」

「そうだな」

レイシエの言葉にアンジエが相槌を打つ。

「クリーチャー、特に大型のものはヴァーテクスを優先的に攻撃する。恐らく、力を持っている事が解るんだらう」

アンジエが口を開いた。

竜型のものは火を吐くという、他の生命体を持たない能力を持っている。そのためか、他に力を持っている者にも敏感なのかもしれない。

「俺が前の街で力を使った事で、あの街も襲われたんだらうな」

「え……？」

「クリーチャーはジオ・フロント内の人口を調整するために存在している」

アンジエは言った。

ジオ・フロント内部に住む人間が増え続ければ、やがてジオ・フロントは人口増加によって溢れかえってしまう。そうなればジオ・フロントに住む人間全てが危険に晒されてしまうのだ。それを避けるために、増え続ける人口を減らし続ける存在としてクリーチャーが作られたのだ。

いずれ、強力な武器を開発するかもしれないという可能性を考慮して、三タイプのクリーチャーが作られる。レベルで分けられたクリーチャーは、その最高位のものならば相当な力でなければ倒せぬようにしてあるのだ。絶えず変動する人間の数を、ジオ・フロント内で生きてゆくのに十分な人口に調整する事で、永続的に人類を生かす。ジオ・フロントの外を知らずに人類が生きてきたのは、目先にクリーチャーという敵対存在があつたためなのかもしれない。

アンジエの語つた言葉を要約すれば、そうなる。

「クリーチャーが人間以外を狙わない理由はそれさ」

巻き込んで殺してしまう事はあつても、基本的にクリーチャーは人間に照準を向けているのだ。

「で、俺みたいな奴が現れると、クリーチャーは大量に放出される」  
ヴァーテクスのような、凄まじい戦闘能力を持つ人間が現れば、クリーチャーを簡単に迎撃する事ができる。それは人口増加を促す結果となり、最終的にはジオ・フロントを壊滅させてしまう。それを防ぐために強力なクリーチャーを多数放ち、力を持つ人間を排除しようとするのだ。

それが、先の街で竜型クリーチャーが五体も待ち受けて破壊活動をしていた理由なのだそうだ。

「じゃあ、私達の街を襲つたのも？」

「あれは偶然だろうな。あの時に俺が力を使った事で、ヴァーテクスの存在を教えたんだ」

レイシエの問いにアンジエは否定した。

「じゃあ、次の街も襲われているかもしれないって事か？」

「その可能性は少くないな」  
開け放たれた窓へとスラッグは言葉を投げ、アンジエも返事を返す。

「まあ、幸い次の街がジオ・フロントの外周に最も近い。何とかなるだろう」

言い、一瞬だがアンジエがレイシエに視線を投げた。

次の街でクリーチャーの待ち伏せにあつたとしても、その街から先は街の外を進む事になる。アンジエとレイシエがヴァーテクスとなつた事で、戦力は単純計算では二倍になっている。障害物の多い街中で戦うよりも、外壁の外の方が戦う事も、逃げる事もやり易いのは事実だ。

「問題は次の街でも待ち伏せされていた時、どれだけの数がいるか、だ」

アンジエが呟いた。

竜型クリーチャー五体ならばアンジエ一人でも殲滅できるだろうし、レイシエが覚醒した今ならば確実に殲滅できる。だが、クリーチャーの数が増えれば増えるほど、やはり苦戦は強いられる事になる。

相変わらず感じる風は不快感と威圧感を持っていた。

「待ち伏せはされてるよ」

スラッグは告げた。風がそう告げている。

「……規模は解るか？」

少しの間をおいて、アンジエが問う。

「そこまでは解らない。けど、さっきよりも多いのは確かだ」

スラッグは答えた。

纏わりついてくる風は進むにつれて不快感と威圧感を増し、殺気すら混じっているように思える。確実に数は増えているだろう。そうなれば、次の街も壊滅しているに違いない。

「……交易列車！」

不意に、レイシエが呟いた。

見やれば、交易列車が途中で停止、立ち往生していた。その前方には明かりが見えるが、かなり離れた場所で停止している。故障した様子もなく、意図的に停車しているのが解った。

「クリーチャーがいたから戻ったって事か」

アンジエは言い、トラツクを更に加速させた。

「この車で行けるところまで行く、しっかり掴まってる！」

声に、スラッグは荷台の荷物を片手で掴み、もう一方の手でトラツクの一部を握った。

交易路の出口が近付いたところで、獣型のクリーチャーが複数飛び出してきた。舌打ちし、荷台の上でスラッグは拳銃を取り出し、前方のクリーチャーへ向けて発砲する。風を読み、クリーチャーの動きを把握しての射撃は、移動しているものでも正確に撃ち抜く事ができる。

立て続けに四発の弾丸を放ち、クリーチャーを三体仕留めた。次から次へと溢れ出して来る獣型クリーチャーをトラツクは蛇行する事でもかわし、交易路から脱出する。

「！」

目の前の光景にスラッグは息を呑んだ。

三種類全てのタイプのクリーチャーが街を襲っていた。数はざっと眺めただけで二桁は越えている。空中では竜型クリーチャーが、地上は獣型と巨人型クリーチャーが手当たり次第に見境なく攻撃を加え続けている。辺りには人間の死体が無数に転がり、無残な姿を晒していた。

「……荷物、放すなよ！」

アンジエの声が飛ぶ。

障害物を避けるようにハンドルを切り、強引な運転で街の中央を駆け抜けていく。途中、何人かの人がクリーチャーから逃げ惑っていたが、助けている余裕はなかった。

「クリーチャーっ！」

前方に舞い降りた竜に、レイシエが悲鳴を上げる。

「ちいっ！」

アンジエの舌打ちが聞こえた。

トラックが急ブレーキをかけ、向きを変えようとする。タイヤが甲高い悲鳴を上げて、慣性がスラッグの身体をトラックから引き剥がそうとする。

クリーチャーが咆え、その尻尾をトラックへと振るった。その衝撃でトラックの車体は拉げ、空中に放り上げられる。

瞬間的に運転席からアンジエがレイシエの腕を掴んで飛び出し、背中に翼を生やすとクリーチャーへと炎を放った。スラッグも荷物を抱えて荷台の床を蹴飛ばし、トラックに巻き込まれて押し潰されるのを防ぐ。荷物の重量でバランスが崩れるが、手に持った荷物を空中で振り回した空気抵抗と慣性で体勢を整えて着地した。

着地したスラッグに横合いから獣型クリーチャーが襲い掛かる。

そのクリーチャーが水の槍で貫かれ、絶命した。

背に翼を生やしたレイシエが駆け寄ってくるのを見て、スラッグは荷物を強引に背負うと拳銃を両手に構え、応戦体勢に入った。

まずは包囲している敵を殲滅し、進路を確保しなければならぬ。いずれクリーチャーは集まってくるだろうから、できる限り早急に道を開ける必要がある。

レイシエが手の先から放水し、それを鞭のように振り回す。強烈な水圧で身体を断ち切られ、クリーチャーが朽ち果てて行く。それを見てとり、スラッグはトラックで向かっていた方向へと駆け出した。背後に警戒しながらレイシエが後を追いかけて来た。そのレイシエの足の速さは今までよりも明らかに向上していたが、ヴァーテクスとしての力を使っている際には身体能力もある程度上がるのだろうかと考え、問う事はしない。

「アンジエ！」

「でかい奴を片付ける！ 先に外へ向かえ！」

空中で炎を撒き散らしているアンジエと言葉を交わし、スラッグはレイシエと共に外壁の出入り口へと向かう。まだ余裕はあるのだ

ろう、アンジエは空中から炎を地上へも放ち、スラッグ達を襲おうとする獣型クリーチャーをも牽制していた。

巨人型クリーチャーが横合いから現れ、その巨大な腕を振るう。寸前で身を退いてかわした二人に、背後から獣型クリーチャーが飛び掛ってきた。風の流れて背後の動きを察知していたスラッグが拳銃で反撃し、空中で攻撃を受けた衝撃で止まったクリーチャーにレイシエが水流の鞭を放つ。獣型クリーチャーを排除した事を確認する間もなく、巨人型が振り上げた腕を振り下ろした。

スラッグ達は両脇へと飛び退き、その攻撃をかわす。巨人型の攻撃に地面が抉れる。

水流の鞭が巨人型クリーチャーの身体を貫き、しなるように震えるところの動きでクリーチャーの身体を切り刻む。そうして崩れ落ちたクリーチャーを無視し、スラッグ達は走り出していた。

「レイシエ右だっ！」

不意に感じた風のスラッグが叫ぶ。

反射的に飛び退いたレイシエの目の前に横合いから巨人型クリーチャーが飛び出してきた。それも、続けて五体。

「右からもか！」

吐き捨てるように言い、スラッグが飛び退いた時、獣型クリーチャーが十体ほど現れる。

巨人型に水流を放つレイシエに、獣型が襲い掛かり、それをスラッグが阻止する。風の流れに横に跳び、背後からの巨人型のハンマーパンチをかわした。瞬間的に荷物を下ろして瓦礫の近くに置くと、スラッグは両手に持った拳銃を連射する。

レイシエが舞うかのように水流の鞭を振り回し、周囲の敵を切断していく。その攻撃の隙を突くように襲い掛かる獣型にスラッグが銃弾を叩き込み、そのスラッグへ攻撃しようとするクリーチャーをレイシエも仕留める。

風が……！

額から滲み出した汗が頬を伝う。

周囲の動きが、空気の流れが複雑に絡み合い、スラッグにも読み辛いものへと変わっていた。辛うじて寸前の行動を読めてはいるが、これ以上密度が上がるようならば動きの察知が不可能になりそうだ。

「後ろ！」

瞬間的に視線を向けたレイシエの背後に、竜型のクリーチャーが舞い降りる。

「え？」

振り返ったレイシエに竜型のクリーチャーが横合いから尻尾を叩き付けた。

「あぐあうつ！」

吹き飛ばされ、傾いた建物の壁にレイシエが背中から激突する。

建物の壁を破壊し、地面に落下するレイシエが、辛うじて足から着地したものの、身体を支え切れずに膝を着く。追い討ちとして吐き出された炎を寸前で水の盾を作り出して受け止めた。苦痛に歪んだレイシエの表情がはつきりと見えた。

「レイ　っ！」

横合いから感じた風に身体が勝手に身を退いていた。

目の前を通過する獣型に銃弾を五発撃ち込み、マガジンを交換する。背後から襲い掛かるクリーチャーを感知し、前転するようにして攻撃をかわし、背後に身体が向いた瞬間にクリーチャーを捉え、射撃。

巨人型の一体がレイシエに接近し、拳を振るうのが見えた。竜の攻撃の衝撃が抜けずにいるレイシエはその拳をかわす事もできずに身体に受け、背後の建物を突き破ってスラッグの視界から消える。

「！」

助けに行こうとして、横合いから飛び掛ってきた獣型クリーチャーに押し倒された。右手の拳銃が手から離れる。

「邪魔すんじゃねえっ！」

叫び、身体を強引に捻って回し蹴りをクリーチャーの脇腹に叩き込み、吹き飛ばした直後に銃弾を撃ち込みながら立ち上がる。駆け



### 第三章 「ブラスト」

#### 第三章 「ブラスト」

街全体を包む空気の流れ全てがスラッグの支配下にあった。同時に、風によって街の全てを把握する。どこで何が、どのように存在しているのが全て。

吹き荒れる風の中央にはスラッグがいる。背には、左側だけの漆黒の翼を生やして。

「ああああああああああつ　！」

咆哮し続けたまま、地を蹴る。

身体は羽根、いや風のように軽い。加速は人間の比ではなく、風のように速度が自在に変化する。

空中で腕を払えば目の前の巨人型クリーチャーの首が跳ぶ。風が刃となってスラッグの腕を延長しているのだ。崩れ落ちるクリーチャーの身体を突風を起こして遠くへ吹き飛ばし、倒れたレイシエの傍に着地した。同時に風が周囲に巻き起こる。

竜型クリーチャーが炎を吐き出す。そこへ手をかざし、風の防壁を巻き起こすと同時に暴風を起こし、風の刃で竜を切り刻んだ。並の刃物を遥かに越える切れ味の刃に全身を刻まれ、身体中から白色の血液を撒き散らし、細切れになった竜がその場で残骸の山を作った。

四方から襲い掛かる獣型クリーチャーを風で振り払い、腕の延長線上に作り出した風の刃で切り裂いていく。両断されたクリーチャーの身体を吹き飛ばして別のクリーチャーにぶつけて怯ませずはさむ。ぐさま切り刻む。

湧き出してくるかのように延々を襲い掛かってくる獣型クリーチャーの位置全てを把握し、その全てに風の刃を送り込んだ。瞬間的に獣型クリーチャーが破裂するかのように切り刻まれ、絶命するの

を風の感覚で確認する。次に巨人型クリーチャーの位置を把握し、獣型同様に全身を切り刻んで排除した。

息が上がり、スラッグは膝を着いた。全身を駆け巡る血液が逆流するかのよう押し寄せ寄せる疲労感に、身体が思うように動かない。

「……くそ、まだいるつてのに！」

呻き、頭上を見上げれば、感知していた竜型クリーチャーへと炎の槍が突き刺さっていた。

続けて三発の槍がクリーチャーに命中し、内側から爆発させる。

熱気が風となり、スラッグにアンジエの存在を伝えた。

強引に身体を立ち上がらせ、空を見渡した。流れくる風は竜型クリーチャーがあと三体残っている事を教えている。そのうちの二体へアンジエが炎の槍を放ったのが解った。凄まじいまでの熱気を帯びた風が竜へ向かって突き進んでいく風の流れが解った。

スラッグとレイシエの真上を通過しようとしたクリーチャーの首に炎の槍が突き刺さり、内側から破裂させる。飛び散った白い血液と、かなりの重量を持つ巨体がスラッグ達を押し潰そうとする。

「がああああああ　！」

叫び、氣力を振り絞って両手を下からものを持ち上げるようにして後方へと送る。

クリーチャーの真下に収束した風の流れが竜巻となってその巨体を上へと突き上げ、持ち上げた。竜巻はそのままクリーチャーをスラッグの背後へと運び、地上へと叩き落す。轟音と共に接触した建物が崩れ落ちた。

「大丈夫か？」

熱気を纏い、空中から降りてきたアンジエを見上げる。

「……危ないだろうが……」

呼吸を整えながら答えたスラッグに、アンジエは無事である事を確認し、レイシエへと視線を移した。既に翼は消失し、足に力が入らずに座り込んでしまい、力も使えない状態に戻っている。

「……息はあるが、危険かもしれないな」

脈拍を確認し、アンジエが呟く。

他者の身体の傷を確認する事がほとんどならしく、正確な診断はできないのだとアンジエは言った。スラッグも同様に、医学の知識はあまり持っているとは言えない。

「少なくとも肋骨が二本は折れてる。下手に動かすのもまずいな」  
言い、アンジエは周囲を見回した。治療できそうな施設も、人もいない。

肋骨が折れているだけならばまだしも、内臓に突き刺さっていたり、突き刺さりそうな状態になっていた場合は下手に動かすのは危険だ。外的な傷痕がない分、診断が難しくもなっている。

「ヴァーテクスは基本的に常人よりも生命力はあるが……」  
アンジエは呟き、もう一度周囲を見回した。

トラックは車体が拉げ、四つあるタイヤが全て同じ方向には向かない状態だ。煙も立ち上り、もう再起不能だろう。

廃墟と化した街には、恐らく人は残っていないだろう。いたとしても数える程で、交易路から別の街へ向かうはずだ。怪我を治療できるような医者を探すとしても他の街に移動せねばならず、その時間を短縮するためのトラックは破損してしまった。

「参ったな……」

溜め息と共にアンジエが言葉を吐き出した。

疲労のためかスラッグの感知力もかなり低下しているようで、風による探知能力はほとんど使えていないと言ってもいい状態だった。今までは街全体を把握できたというのに、今では自分自身の身体感覚しか残っていない。人を探すのも難しい状況だった。

「治してあげましょうか？」

突然背後から掛けられた声に、スラッグとアンジエが振り返る。

「久しぶりね、アンジエ」

そこには、一人の女性が立っていた。

両目は薄い黄色に染まり、軽いウェーブのかかった髪は栗色に染められている。肉付きの良い身体はバランスが取れていて、美しい。

少しだけ細められた視線で二人を見つめる女性に、アンジエが口を開いた。

「トラン、お前……」

「話は後にして、その彼女の事を先にしましょう」

アンジエの言葉を遮り、トランを呼ばれた女性はスラッグとアンジエの間に割り込むようにしてレイシエの脇に屈み込んだ。

彼女がレイシエの身体に手をかざした直後、トランの背中に一對の白い翼が生じた。そして、彼女の掌が淡く光を放つ。

「肋骨が二本折れてて、背中の方でも二本。右肩の間接が砕けてて、頭蓋骨表層にも罅があるわね。内臓の損傷は軽微、かな」

「解るのか……？」

「私の力は治療能力だからね、解るわ」

スラッグの言葉に、トランは言い、小さく笑みを見せた。

「そうそう、今のうちに使えそうな車探してきてくれる？」

「……何だと？」

その言葉にアンジエが眉根を寄せる。あまり快く思っていない事を前面に押し出しているような声だった。

「私も外に戻りたいから、同行させてもらっわ」

「……勝手にしろ」

トランの言葉に舌打ちし、アンジエが車を探しに離れて行く。

「……知り合い、なのか？」

「そうね、知人以上ではあるわね」

スラッグの言葉に、トランが答える。

トランの掌を包む光がその輝きを増し、光の粒子が溢れ出した。

その粒子はレイシエの身体に吸い込まれるようゆっくりと舞い降り、身体に触れるとその内部へと潜り込むかのように透過していく。粒子が触れた部分は光を帯び、それが徐々に傷を受けた場所全体に広がって行った。

それは神秘的な光景だった。

「……あなたは車探しに行かないの？」

「ちょっと疲れてて動かない」

ふと思い出したかのように問うトランに、スラッグは答えた。それに納得したように頷くと、トランはレイシエに意識を戻した。

レイシエの表情が少しだけ和らいだように見えた。

「うん、これで骨は元通りね。内出血しているところも少ないみたいだし……」

そう呟いてから数分でトランの背にあった翼が消えた。

「これで治療は終わり、少し立てば目も覚めるわ」

「良かった……」

トランの言葉にスラッグが安堵した時、近くに車が停車した。アンジエだ。

前に使ったものと似た型の軽量トラックだった。その車を見つけてくるまで休憩を取っていたスラッグは、アンジエと共に近くに置いておいた荷物を集め、荷台に乗せた。その間にトランがレイシエを荷台に寝かせる。

準備が済み次第すぐさまアンジエはトラックに全員を乗せ、発車した。レイシエが荷台に寝かされたため、助手席にはスラッグが座る事となった。スラッグ自身は荷台でいいと言ったのだが、アンジエが助手席にスラッグが座る事を強く希望したため、そうなったのである。どうやら、アンジエはトランにあまり良い印象がないらしい。

トラックが崩された外壁を越えた辺りで、レイシエが呻き声を上げ、目を覚ました。

「あ、れ……？ 私、どうしたの……？」

「レイシエ！ 気が付いたんだ？」

助手席からできるだけ荷台に顔を向け、スラッグが呼び掛ける。

「酷くダメージを受けてたから私が治療したのよ」

「え？ あなたは？」

「私はエルリルア・トラン・デシエート。リアって呼んでね」

レイシエに名乗り、リアは微笑んだ。

「そうなの？　ありがとう」

レイシエは礼を言い、自らも名乗った。それに加えてスラッグの紹介までもしてくれた。

どうやら、スラッグが覚醒した時には既に気を失っていたらしく、スラッグが戦っていた事は知らないようだった。

「スラッグがあなたが気絶している間戦っていたのよ」

丁度考えていた事をリアが告げた。

「あ、スラッグも覚醒したんだ？」

「まあ、そうなる」

レイシエはただ喜んだだけで、スラッグは反応に困って生返事を返していた。

「何？　どんな能力？」

「風だよ、風」

興味津々といった様子で尋ねてくるレイシエに言い、スラッグは説明した。

周囲の大気を操ると同時に、その変化を感覚として把握できる能力である事を。

「やっぱり、風だったんだ」

レイシエの言葉に、スラッグは相槌を打つ。

前々から、風に敏感だとは思っていたが、それがヴァーテクスとしての力だったとは思っていなかった。アンジエから話を聞いて、もしかすると予想はしていたが、その通りだったらしい。

「黒い片翼は稀なタイプだ」

アンジエが言った。

「本来、片翼は不安定なもので、能力は平均して低くなる」

両方の翼を形成させる事で力の制御を安定させているらしいが、一方の翼しか形成できない者もいるらしく、そのタイプの者は能力の制御が安定せず、強い時も弱い時もあるらしい。だが、安定していない分、両翼の者のように力を発揮できず、総じて能力値としては低くなるようだ。

「黒い翼は能力が極めて高いものとなる」

「どうやら、標準の白い翼とは違い、漆黒の翼は力の制御を行うものではないらしい。本来ならば制御のために純粋なエネルギーだけを背中に翼として作り出すものだが、黒い翼を持つものは力の制御を必要とせず、全エネルギーをそのまま支配下に置くのだそうだ。そのため、翼は力の余剰分として作り出され、莫大な力を扱う肉体が崩壊しないように排気しているのだと言う。」

「もっとも、黒い翼の場合は片翼がほとんどだがな」

余剰エネルギーを排気している黒い翼の場合、安定性という値が翼には存在しない。排気エネルギーが多ければ多いほど、ヴァークスとしての力は高いものになるのだ。つまり、黒い両翼を持つ者は凄まじいまでの力を操る事ができるという事だ。黒い片翼の状態ですえ、基本的には白い両翼よりも能力値は高くなるとされているらしく、それが両翼に増えれば単純計算では二倍の力を持つ事になる。白い両翼が一般的なのだとすれば、黒い両翼は突然変異のようなものだ。」

「ねえ、片翼が両翼になったりはしないの？」

アンジェの説明が終わったところで、レイシェが口を挟んだ。

「稀にあるらしいが、実際に俺は見た事がない。デマだという奴も少なくは無いしな。もっとも、可能性もゼロじゃないだろうが」

曖昧な返答だったが、アンジェも確実に肯定できないのだろう。

実際に目で見た訳でも、確認した者と直接会話した事もなければ、噂の真偽は解らない。その噂の真偽がどちらにせよ、可能性があったところで極めて低いのは明白だ。

「結局、解らないって事じゃない」

「……悪かったな」

リアの呟きにアンジェが不満そうに言った。

「えらく不機嫌じゃない。そんなに私が気に食わないの？」

「そう思うなら静かにしててくれ」

アンジェは言い、トラックの速度を少しだけ上げた。

「何かあったの？」

「そうねえ……話すとアンジェが怒るから、また別の機会にね」

レイシエの問いに、リアはアンジェに視線を向けてから苦笑して告げた。スラッグも助手席からアンジェの横顔へと視線を向けていたが、あまり快く思っているような表情ではなかった。

開け放った窓の枠に肘を置き、頬杖を着くようにしてスラッグは仮眠を取る事にした。力を使い過ぎたのか、元々疲労感が大きいものなのかは解らないが、スラッグは直ぐに眠りに落ちて行く。

舗装されていない地面の揺れですら、スラッグの仮眠を妨げる事はできなかった。

最外部の街からジオ・フロントの内壁までにはかなりの距離がある。最外部に住む者達にもジオ・フロントの内壁と解る距離にしてはおけないのだ。

二日ほど車で移動した辺りで、目の前の風景は変わっていた。途中、山や森を抜けたが、最終的に辿り着いたのは崖だった。

左右を見渡せば、そこから先に大陸は無いように思える程である。実際のところ、アンジェも大陸はないと言っていた。つまりは、そこがジオ・フロント内部の世界の果てなのである。

風も、どこか今まで過ぎて来た場所とは違う雰囲気を持っている。

「下の方はどうなってるの？」

「ジオ・フロント内部の地下水を組み上げて天井に回す機構がある」レイシエの問いに、アンジェは答えた。

落下すれば二度と戻っては来れない。いや、そもそも外縁部にまで辿り着いた普通の人間はいないだろう。いたとしても、途中でクリーチャーに殺されていておかしくはない。言うまでもなく、スラッグ達もここに辿り着くまでに戦闘を複数回に渡って行っている。「ここから先はどうするんだ？」

「飛べばいい」

スラッグの問いにアンジエは言い、背に翼を作り出した。

熱気を纏い、身体を浮かせるとゆっくりと前に進む。そうして振り返り、スラッグ達を見た。

「レイシエは飛べるのか？」

「うん、大丈夫だと思う」

そのスラッグの問いに頷き、レイシエも背に白い翼を生やす。翼に水流を纏わせ、それを下方に噴射する事で滞空する。

「リアは？」

アンジエは熱量を放出する事で、レイシエは水流の圧力で身体を浮かせているが、そういつた物理的な力ではない治療の力で滞空できるものなのだろうか。

「私は運んでもらう方が楽かしら」

言いながら、リアは翼を作り出し、地面を蹴飛ばして空へと上がった。

「元々、翼はエネルギー体だ。それを使つての飛翔も不可能じゃない。力を使う方が楽だからそうしているだけだ」

アンジエが言い、スラッグを見る。

身体能力の補助などにも翼が放つエネルギーは使われているらしい。同時に、そう長い距離でない場合は背中の翼のエネルギーを飛翔用に使う事も可能なのだそうだ。

納得し、スラッグは背に作り出した。瞬間的に周囲の風の流れが感覚となり、左側だけの漆黒の翼が背にある事を目で確認する。

風を纏いながら地面を軽く蹴つて空中に上がり、レイシエ達と合流する。それを確認したアンジエが先行し、スラッグ達がその後を追う形で四人は内壁へと近付いて行った。

崖の先の青空だと思っていた部分が、近づくにつれてはつきりと壁だと判断できるようになって行く。

アンジエの説明によれば、内壁は全てが空を映し出すスクリーンとなつているようだ。そのスクリーンの合間には細かく穴が開けら

れ、雨や雪などを降らせるための機構が備えられている。ジオ・フロント内は気圧が制御され、全体高度の半分ほどには雲が存在できるようにになっているのだ。

無論、内壁のどこにでも外への出入り口があるわけではなく、いくつかある出入り口の中から、今向かっている出入り口からはアンジエが入ってきたのだそうだ。リアは別の出入り口から入っていたらしい。

目の前にまで近付けば、それが空ではない事に気付く。違和感が生じるのである。

「……本当に閉鎖空間だったのか……」

思わず、スラッグは呟いていた。

小さな声だったためか、他の誰もその声に反応する者はいなかった。どうやら聞こえなかったらしい。

「ここだ」

言い、アンジエが内壁の一部に手を触れた。

その直後、内壁が四角く奥に減り込んだかと思うと、横へスライドし、通路が現れた。

リア、レイシエ、スラッグ、アンジエの順で通路内に着地し、翼を消す。最後尾のアンジエが通路の出入り口を閉ざし、先頭に回った。

「ここから先はクリーチャーではなくガードユニットが現れる」

「ガードユニット？」

アンジエの言葉にスラッグは首を傾げる。

「この内部への侵入者を排除する機械だ」

ジオ・フロント内部は生体兵器としてクリーチャーが放たれているが、通路内にはガードユニットと言う機械兵器が存在しているのだと言う。外へ続く通路は内壁裏の重要な機構を操作する事が可能な場所もあるため、そういった機構の操作を防ぐと同時に、ジオ・フロントの内外の関係を絶つために通路への侵入者を排除しているようだ。

「そんなものがあるのか？」

「クリーチャーと違ってガードユニットは銃火器が主な攻撃方法だ。同じようなものだと思わない方が良い」

確認を求めるスラッグにアンジエは告げた。

銃火器、つまりは射撃的な攻撃が敵の主な攻撃方法になるという事である。基本的には接近しての直接攻撃が主体だったクリーチャーとは戦術を変えなければならぬ。

そうして簡単に説明を受け、通路を進み始めたスラッグは風がジオ・フロント内とは違う事に気が付いた。換気されているのか、それとも一定の動きで管理されているのか、風の流れが安定しているように感じる。安定とは言っても、自然な感覚ではなく、一定のリズムやコースに従って風が流れているように感じた。

「通路が広くなるわね」

リアが呟いた。

見れば、通路の幅が広がり、四人並んで歩ける程の幅になっている。天井も少しだけ高くなり、空間的な余裕を感じた。

「来たっ！」

言い、アンジエが背に翼を作り出す。それと同時に炎を前面に集約させて壁を作り出す。

熱風に混じって、炎の向こうで風が動くのを感じた。近い風の動きの感覚は、拳銃の弾丸。そう思った時にはスラッグも背に翼を作り出していった。

「ガードユニットと連戦で地上まで突っ切る事になる、力は多少温存しておけよ」

アンジエが言い、駆け出した。

全力の走りではない速度で走り、炎を周囲に撒き散らす。広くなつたとはいえ、狭い通路内で反射した炎が熱気を周囲に撒き散らした。その炎をスラッグが風を切って進む事で打ち消し、その後をレイシエとリアが追いかける。

前面を炎で焼き払いながら進むアンジエが曲がり角で立ち止まっ

た。背中を壁に押し付け、そつと曲がり角から頭を出して通路の先を確認する。

「　　まずい！」

何かが飛来するのを感じ、スラッグは叫んだ。

アンジエは曲がり角に炎を撒き散らし、壁にしようとする。しかし、スラッグが風の流れて感じたものは、ロケット弾だった。ロケット自体は炎で防げるが、爆発と衝撃が突き抜けてくるだろう。スラッグは両手をかざし、アンジエの手前の大気を練り上げ、集約させていった。

ロケット弾が爆発し、衝撃と爆風が周囲に放たれる。その瞬間にスラッグは集約させた風を反発させ、爆風と衝撃波を押さえ込んだ。両腕が痺れるような感覚を堪え、集約させた風の防壁でロケット弾の破壊力を凌ぐ。衝撃波は大気分子の振動によって起こるものだ。ならば、同じ大気分子の振動である風で打ち消す事もできる。

「行けえっ！」

防壁として集約させた風を曲がり角の先へと押し出し、突風として流し込んだ。その先にいた何かが吹き飛ぶのを感じて、スラッグはアンジエに目配せする。それに頷いたアンジエが角から飛び出し、右手に集約させていた熱気を解放、白熱する炎の槍を通路の先へと放った。

角を曲がって見やれば、そこにはロケットランチャーらしいものを搭載した機械があった。小型の戦車を思い起こさせるような複数のタイヤの上には箱型のボディがあり、その両側には銃器らしいものが、上にはロケットランチャーらしいものを乗せている。それもガードユニットの一種なのだろう。

そのガードユニットはボディの中央が溶解し、穴が開いていた。アンジエの炎の槍が貫通したらしく、機能停止していた。

「ガードユニットは機体を制御しているAI部分を破壊できれば停止する」

アンジエが言い、ガードユニットを飛び越えて通路の先へと進ん

で行く。スラッグもそれを追うように駆け出した。

通路脇の左右の壁の一部が開き、中から先程と同型の箱型ガードユニットが複数表れる。それがスラッグ達の方へ向いた瞬間には銃口から銃弾が連射され、炎の壁によって蒸発した。

「フレイム・ウォール」

呟き、アンジエは自ら作り出した炎の壁を前面へと押し出した。

凄まじいまでの熱量を持つ炎が通路を駆け抜け、前方にいたガードユニットを溶解させていく。

それほどまでの熱量を持っているというのに、通路の壁自体は変形すらしていない。特殊な材質でできているのか、何か特殊なコーティングが施されているのかは解らないが、随分と強固に作られているようだ。

炎の壁を前面に押し出し、通路を進んで行くアンジエを追う。

「リア！ 後ろだ！」

不意に感じた風の流れに、スラッグは身体を反転させると同時に後方へ風を放つ。その風で、壁の左右から現れた箱型兵器を吹き飛ばした。背に翼を作り出したレイシエがそこに水流の鞭を打ち込み、両断する。

背後の空気の流れに注意を払いながら、スラッグはリアとレイシエを先に行かせ、最後尾となって通路を進んだ。

「ちっ、修復されてやがる……」

前方でアンジエが呟いた。

通路とは違い、明らかに広く作られた空間だった。学校の体育館のような広さの部屋には、これまでとは異質なガードユニットがいた。複数の間接を持つ脚部が複数存在し、その上には人間の上半身に近いボディがある。だが、その腕は二対あり、一対はガトリングガン、もう一対はキャノンと化していた。更に、頭部はなく、胸部中央にはセンサーカメラなのか、レンズらしいものがある。

スラッグがその部屋に入り、全員が室内に入った直後、今まで進んで来た通路が閉ざされた。退路を断たれたという事である。

「ガードユニットのレベルツォ……」

アンジエが呟く。

退路が断たれた直後、ガードユニットの胸部のレンズが赤く光を  
発した。

「ねえ、何……?」

「侵入者を確実に排除するために、強力なガードユニットを置いて  
あるんだ。しかも、そのガードユニットが十分に性能を発揮できる  
ように部屋も大きく造られている」

レイシエの問いにアンジエが答え、身構える。自然と、スラッグ  
も身構えていた。

機械の駆動音や、内部機構の微細な動きが微妙な空気の流れとな  
ってスラッグの感覚に刺激を与えている。

「ここに入る時にも破壊したはずだが……再配備されてるな」  
アンジエの表情が今までよりも真剣なものに変わっていた。

駆動音が高まり、ガードユニットが跳んだ。クリーチャーのよう  
な生物的な動きではなく、直線的な動きでガードユニットが壁に張  
り付いた。同時に、四つの銃口がそれぞれ一人ずつに向けられ、放  
たれる。

「フレイム・ウォール!」

アンジエが炎の壁を作り出し、ガトリングガンの弾丸を防ぎ、リ  
アも横へ跳んでキャノン砲をかわす。

「風っ!」

右手をかざして突風を巻き起こし、凄まじい勢いで連射される弾  
丸全ての軌道を逸らす。レイシエは水流の鞭でキャノン砲を途中で  
両断して爆破していた。

「スプレッド・フレイム!」

壁にしていた炎を細かな炎に分解し、それをガードユニットへと  
放つ。多脚のガードユニットが壁から跳躍し、天井に張り付いてガ  
トリングガンの弾丸を撒き散らす。

それをスラッグの起こした暴風で吹き払い、レイシエが水流を放

った。天井を高速で歩行しながらキャノン砲が四発連射され、ガトリングガンの弾丸が雨のように降り注ぐ。

アンジエの炎とスラッグの風が全ての攻撃を受け止め、レイシエの放つ水がガードユニットを攻撃する。

一人で戦うよりも、四人いる今の状況はむしろ不利なのかもしれないとスラッグは感じた。動ける空間が部屋として限定されている中では、敵には標的が複数あると言う事になるのである。ヴァーテクスの方がいくら物理兵器よりも強力なものだと言っても、敵による仲間への攻撃がある事や、仲間に向かってしまうかもしれないという事を考えれば、全力で戦う事も難しいだろう。

仲間への攻撃を防ぎながら、仲間への影響を最低限にしつつ敵を攻撃しなければならぬのだ。特に、アンジエのような熱気でダメージを与えてしまいかねない能力や、スラッグのような風で仲間の行動を阻害しかねない能力は限定された空間内で複数人数で戦うのには向いていないのかもしれないのだ。

退路が閉ざされている状態では、ガードユニットと一対一にはなれない。

「トラン！ お前も攻撃しろ！」

不意に、アンジエがリアに声を投げた。

「……あんまり人前で使いたくはなかったんだけど、仕方ないわね」溜め息混じりに呟き、リアが手を薙いだ。

僅かな風の動きでスラッグはリアの能力の発動を認識する。瞬間、光が放たれていた。その一筋の閃光がガードユニットのレンズに命中する。一瞬だけ照射された光がガードユニットの光学センサーに強烈な刺激を与えて破壊させたのが解った。

一瞬、ガードユニットが動きを止める。

「今だ！」

アンジエの号令と共に、攻撃が集中する。

風の刃が複数の脚部を切断し、水流が四本の腕間接を吹き飛ばし、白熱した炎がボディを貫く。熱気が風によって乱され、水流を蒸発

させて湯気へと変えた。そんな中でガードユニットが爆発を起こした。

スラッグは頭上から降り注ぐ瓦礫を風で部屋の隅へ追いやる。ガードユニットの存在が消えたためか、通路が開かれた。躊躇う事なくアンジエがその通路へと進み、スラッグ達も後を追った。

「リアさん、二つも能力を持ってたんですか？」

「そんなに珍しい事じゃないわよ」

レイシエの言葉にリアは苦笑して答える。

リアによれば、能力を二つ持っている者の方がヴァーテクスには多いらしい。ただ、リアの場合は二つ目の力は人前ではあまり使わないようにしていたとの事だ。

「奥の手にしてるの、自衛のためにね」

苦笑してリアは言った。

治療の力しか使えないと思わせておく事で、不意打ちする者を撃退するのだそうだ。元々、光を操るといふ破壊力に欠ける力のため、対処方法を考えられてしまうと極端に不利になるのだ。光には微小な熱量と運動エネルギーしかないのだから。

もつとも、光を操作できるという事は、視覚情報に関わる全ての事象を掌握できるという事でもある。それは、視覚を潰されると同義だ。戦闘では重要だと言える視覚を潰されてしまう能力だと敵が気付けば、対策をとられてしまう。リアが恐れているのはそれが。今回は、複数人数でガードユニットの強化型を相手にしたための不利な部分を解消するために、最低限の力を使用したようだが、今後リアの協力は考えない方が良さそうだった。どこで誰が見ているか解らないのだ。

「あなた達だつて二つ能力を持っているかもしれないのよ」

「そうなのか？」

リアの言葉にスラッグが問う。

現時点では、スラッグ自身、風以外に何か力が使えるという感覚はない。

「少なくとも、アンジエは奥の手を持つてるわよ」  
「トラン！」

そのリアの言葉にアンジエが鋭い声を投げた。その声にリアは肩を竦めて見せた。

「まあ、潜在能力つてところね」

潜在的に秘めているもう一つの能力があるかもしれない。少なくとも、アンジエとリアはそれを持っているという。その力を使うにも、やはり何かのきっかけで力自体を把握しなければならぬのだらう。

「エレベーターは二人までしか乗れないが、どうする？」

突き当たりのドアの前で、アンジエが言った。

今までジオ・フロント内壁の外周通路を進んで来たが、ここでようやく地上へと近づく通路に出たらしい。エレベーターで上層階に上がり、そこからまた通路を進み、地上への出入り口に続いているらしい。

「案内役のアンジエは先に言った方がいいだろ？」

スラッグの言葉に、アンジエは頷いた。

「じゃあ、私かしら？」

「できれば他の奴にしてくれ」

リアの言葉に、アンジエは渋い顔をして見せる。

「私が行くわ」

「よし、行こう」

スラッグが何か言う前にレイシエが言い、アンジエは頷いてレイシエをエレベーターに引き入れた。ドアが閉ざされ、エレベーターが上昇して行く空気の流れが読めた。

「……そんなに嫌われてるなんて、何かあったのか？」

「んー……、外に出て、アンジエがいない時に教えてあげるわ」

スラッグの疑問に、リアは苦笑して答えた。

過去に二人の間に何かがあったのは間違いないが、それがいまいち解らない。知る必要がないと言われてしまえばそこまでのはずな

のに、リアは何故かそうは言わなかった。つまりは、教えると言っているのである。ただ、時期が今すぐというわけではないだけで。「ところで、あの娘の事はどうなの?」

「どうって?」

「あの娘自身はあなたの事、あまり意識してないみたいじゃない」

「……そうかもね」

リアの言葉に、スラッグは苦笑して答えた。

「それでいいの?」

「……解らない」

言い、スラッグは溜め息をついた。

正直なところ、スラッグはレイシエに好意を寄せているのは事実だ。だが、レイシエはスラッグに好意を寄せているようには感じられない。リアはそこを問うているのだろう。

「……一途なのはいいけど、言い出せなきゃ馬鹿よ? ずっとナイトでいるわけにもいかないでしょう?」

「まあ、ね……」

リアの言葉に、スラッグは反論できなかった。

やがて降りてきたエレベーターに乗り、リアが操作パネルのボタンを押す。ゆっくりと加速して上昇していくエレベーターの中で、リアがスラッグに向き直る。

「あなた、彼女の事好きなんですよ?」

スラッグの背後の壁に手をつけて、リアがスラッグに顔を近付ける。鼻先が触れる寸前までリアの顔が近付いていた。身を退こうと背中を壁に押し付けても、それ以上後ろには下がれない。

「な、何を……?」

香水でもつけているのだろうか、微かに甘い匂いがした。

その体勢のまま最上層に辿り着き、ドアが開く。

「何してるの?」

「れ、レイシエ……!」

「早く行こうよ、もう近いらしいし」

慌てるスラッグとは裏腹に、レイシエはいつもの調子で言い放つ。リアが身を退き、スラッグがレイシエの後を追って駆け出す。スラッグがリアとすれ違う瞬間、微かにリアが呟くのが聞こえた。

「脈なし、なのかしらね……」

その言葉はスラッグも前から感じていた事だった。恐らく、リアはスラッグではなくレイシエを試そうとしていたのだろう。スラッグを誘惑しているように見せて、レイシエがどう反応するかを見ようとしていたに違いない。

左右の壁の一部が開き、機銃が向けられた。スラッグが風の刃でその付け根を切断し、更に現れた箱型ガードユニットを焼き払う。熱気が通路を満たすが、スラッグが風で熱を散らした。

「前々から思ってたんだけど、壁を突き破って上には行けないのか？」

「ジオ・フロントの内壁や通路の壁は特殊な素材でできていてね、強度も耐性も並じゃないのよ」

スラッグの問いにリアが答えた。

確かに、ここまで来る以前にスラッグはガードユニットを破壊するのと同時に壁にも攻撃を加えていたが、びくともしなかつた。やはり、ジオ・フロントという巨大な空間を維持するために内壁の構造には気を使っているのだろう。

「今じゃもう精製する技術すらないんだけどね……」

苦笑し、リアが告げる。

遙か昔に造られたもので、時代が変わってしまった現在では同じ素材を精製する技術が失われてしまっているらしい。

「一体、どうなってんだよ歴史は……」

「外に着いて落ち着いたら教えてあげるわ」

スラッグの呟きにリアが言う。

「この先に最後のガードユニットがいる。気を引き締めておけよ」  
アンジェが言い、開けた空間に入った。

多脚型ガードユニットと戦った部屋よりも広く、目の前に存在す

るガードユニットも巨大なものになっている。人間二人分はあるかと思わせる程の太さの脚部に、多種多様な銃口を持つ両腕、重厚感のある巨軀は全身が装甲で覆われている。頭部はなく、流線型の胸部に、背部にはバーニアが複数。そのガードユニットが三体、室内で待機していた。

スラッグ達が室内に入った直後に退路が断たれ、ガードユニット三体が機動する。

「私は回避に専念するわ。こいつらは光学センサーだけじゃなくて熱・音・振動感知センサーもあるから」

「勝手にしろ！」

リアの言葉にアンジェが応じ、三人がそれぞれ一体ずつを相手にするかのようにならせた。

スラッグは周囲の感覚に集中し、風の流れを掌握する。大気の振動の全ての自らの触覚に直結させ、目の前のガードユニットが動き出すよりも早く風の刃を打ち出した。装甲に命中した風の刃は、しかし完全に装甲を裂く事ができずに周囲に拡散してしまふ。

両手から放たれた銃弾を横に跳んでかわし、着地と同時に風を纏って跳躍。ガードユニットの真上を飛び越え、風を槍として放つ。

ガードユニットは背部バーニアを点火し、想像以上の速度で槍を回避した。同時に一瞬で向きを反転し、両腕からミサイルを放つ。風の防壁でミサイルを逸らし、二つのミサイルを互いにぶつけさせて破壊する。着地し、側転するようにしてマシンガンの掃射をかわし、意識を集中する。

大気を掻き集めるようイメージし、圧縮した空気でガードユニットの右腕を包み込む。その空気を解放すると同時に引き千切るように動かし、圧縮空気を炸裂させた。爆発さながらの音を周囲に放ち、ガードユニットの右腕が吹き飛んだ。

残った左腕のマシンガンを掃射するガードユニットに、スラッグは風を纏って横へ回り込むように駆け出す。足元を銃弾が跳ねるが、軌道は大気の動きで読んでいた。左腕の下部が開き、グレネード弾

が放たれるが、スラッグは大気を練ってそのグレネード弾を捉え、軌道を捻じ曲げた。レイシエが戦っているガードユニットの背面にグレネード弾の進路を曲げ、風を開放する。背面の動きに気付いたのか、ガードユニットが回避行動を取ろうとバーニアに点火した瞬間、レイシエの放つ水流がガードユニットの左脚部を切断していた。バランスを崩し、バーニアの加速で床に激突したガードユニットにグレネード弾が命中し、背面が吹き飛んだ。

スラッグは背面宙返りをするように、ミサイルを飛び越えて回避し、圧縮空気の塊を本来戦っていたガードユニットへと放った。一瞬でガードユニットに到達した空気を炸裂させ、バランスを崩したガードユニットを横合いから白熱した炎が貫いた。装甲が溶解し、熱量が内部を焼き、燃料を吹き飛ばし、ガードユニットを爆発させる。

大気感覚で機能停止を確認しつつ、スラッグは先程グレネード弾を命中させたガードユニットに意識を向けた。レイシエは銃弾とミサイルを水流で防いでいる。その攻撃を繰り返しているガードユニットは片足を失い、背面バーニアも使用不可となり、固定砲台と化していた。だが、火力として油断はできない。

スラッグは背部バーニアが吹き飛んだ隙間から大量の風を送り込み、ガードユニットの内部で圧縮させて行った。そして、十分だと判断したところで圧縮空気を炸裂させ、内部機構を一気に吹き飛ばす。痙攣したかのようにがくがくとガードユニットが震え、機能を停止した。

一方、アンジエは巨大な炎の剣を作り出し、それをガードユニットに振り下ろしていた。五メートル以上もある巨大な炎の剣は白熱し、陽炎を纏っている。その剣を正面に浴び、ガードユニットが溶断される。装甲がへこみ、変形し、溶け、避ける。その流れが一瞬で起き、ガードユニットが両断された。

そうして三体のガードユニットが沈黙し、四人が一箇所に集まった。

「全員、無事だな？」

「うん、大丈夫」

アンジエの問いに、レイシエが頷いてみせる。

「この先に外への出入り口がある」

仲間を見渡して言い、アンジエは開いた通路へと歩みを進める。

スラッグ達もそれを追いかけて、通路に入った。

そこは今までの通路と違い、通路の電灯は少なくなり、少しずつ薄暗くなって行く。やがて電灯がなくなったが、スラッグ達の背にあるエネルギー体の翼が明かりとなっていた。

微かに、今まで感じた事のない、新鮮な感覚の風が流れ込んでいるのを感じた。それは紛れもなく、今までアンジエが纏っていたと感じてきた風であった。

そうして、アンジエが立ち止まり、上へと手を伸ばす。

「ここから先が、外だ」

天井の一部が外され、強烈な光が差し込む。

瞬間、一気に流れ込んできた『外』の風にスラッグは理解した。

何故、ジオ・フロントを出る決意をしたのか、を。外の風、それはアンジエから感じた風だ。

俺は、この風に惹かれていたんだ……。

## 第四章 「ブルースカイ」

### 第四章 「ブルースカイ」

今まで感じて来たものよりも、澄み渡った風と、青い空。ヴァーテクスとなった今なら、ジオ・フロント内部の風が人工的な、機械的に調整されたものなのだとスラッグには解る。太陽の眩しさに目を細め、鳥の囀りに耳を傾ける。

「疲れただろ、今日はゆっくり休もう」

アンジエは言い、近くの木陰にテントを張った。

持って来た荷物の中から携帯用の調理器具と食材を取り出し、食事を作る。

「ヴァーテクスは街って、遠いのか？」

「そうだな、ジオ・フロントの入り口からはだいぶ離れている。一日や二日では辿り着けない距離だ」

食事を取りながら、アンジエに今後の行動を問う。

まずはスラッグ達を地上の街に辿り着かせる。それがアンジエの提案だった。元々、スラッグとレイシエはジオ・フロントから外に出る、という事だけを考えていたため、今後の事はあまり考えていなかった。だが、実際に外には出れたのだから、今後どうするかは考えなければならぬ。

最も近い街へ辿り着くにも一週間ほどの時間を要するらしい。

「外の世界はどうだい？」

「綺麗ね。それに、広くて……」

アンジエの問いに、レイシエは笑顔で答える。

レイシエがいつも抱いていた、際限の無い世界の中にいる。どこかでレイシエはジオ・フロントが地下である事を見抜いていたのかもしれない。スラッグが風を感じられたように、水を扱えるレイシエが、ジオ・フロント内で触れた水に何かを感じていたとしてもお

かしくはないのだから。

やがて、食事を終えて辺りが暗くなつて来た頃、アンジエがテントの中へ入った。ここまで案内するために、最も気を使っていたのはアンジエだ。その疲れが外に出て現れたのだらう、真つ先に寝付いていた。

「……私もそろそろ寝るわ」

「ん、解った。俺はもう少し起きてるよ」

立ち上がったと言うレイシエに答え、スラッグは空を見上げた。

心地良い風だと思う。ゆっくりと、それでいて時折激しい、全てを含み、全てを包み込むような風。

「こうして見ると、ジオ・フロントの中がどれだけ精巧にできてるのか解るな」

「そうね。極限まで自然に近付けないと、人間は違和感を感じるから」

スラッグの呟きに答えたのはリアだった。

「いいの？ アンジエと寝かせて」

「何が言いたいんだよ？」

リアの言葉に、スラッグは溜め息をついた。

外に来てからというものの、レイシエはアンジエにしか話し掛けない。スラッグやリアが話を振れば答えるものの、自主的に会話しようとしたのはアンジエだけだ。外の事を知っていて、ここまで連れてきてくれた存在だから、と説明付ける事はできても、嫉妬感がゼロなわけではない。

「……昔、人類は科学技術で発展してたのよ」

「え？」

不意にリアが語り出した。

科学技術によって繁栄していた人類だったが、争いは絶え間無く存在し、人口増加や食糧危機、環境汚染などの問題が山積みであった。その繁栄は大量破壊兵器の大量投入によって幕を閉じる。その戦火により環境は悪化し、生命が存在するには厳しい状況となつて

しまったのである。その環境から逃れるために人類は地下にジオ・フロントを作り、移住した。

一部の人類はジオ・フロントへの移住を拒み、荒廃した地上で生活を続ける。当初は交易のあったものの、やがて地上と地下の交流は途絶えた。それから時が流れ、地上には厳しい環境に適応した生物が現れ始めるのと同時に、ヴァーテクスが出現し始めた。地上の人間が環境のためか全てヴァーテクスとなった頃、ジオ・フロント内でも変化が起きた。ヴァーテクスという存在が現れた事で、地下生活をしている人類からヴァーテクスが現れる可能性が出始めたのである。

「ヴァーテクスはね、皆ミドルネームがあるの。これは交流があった最後の頃、ヴァーテクスが出始めた頃からの風習みたいなものとして地下には伝わってるわね。地上ではアンジェみたいに、ミドルネームがある事、つまりヴァーテクスである事に誇りを持っている人もいるから、憶えておいて」

リアは言い、そこで話を一度区切った。

「今、地上では、世界中の人間をヴァーテクスだけにしようっていう組織があるの。それに所属する人はエクシキューターって呼ばれてるわ」

「エクシキューター？」

放っておいても、地下からもヴァーテクスが誕生するのだから、いずれは勝手にヴァーテクスだけになるのではないだろうか。

「騒がないでね。……エクシキューターっていうのは、ジオ・フロントを破壊しようとする人達なのよ」

「！」

声を上げそうになったスラッグの口をリアは素早く塞いだ。

「ジオ・フロントを破壊すれば、地下の人間は全滅。世界中のジオ・フロントを壊せば、必然的に世界に残るのはヴァーテクスだけになる」

リアの言葉に、スラッグは何も言えなかった。

ジオ・フロントを破壊する前に、ジオ・フロント内にいるヴァーテクスを外へ連れ出す事もエクシキューターの仕事の一つなのである。ヴァーテクスにとって、同じヴァーテクスは仲間だと言う意識が強いらしい。だが、ヴァーテクスを疎外する可能性の高い人間達は、排斥する方向にあるのだそうだ。

「こここのヴァーテクスはあなた達で最後。だから、アンジエはある程度離れたらこのジオ・フロントを壊そうとするわ」

何を考えれば良いのか、スラッグは解らなくなっていた。何も考えられない。

ジオ・フロントを破壊したいと思う側の感情も、それに反対する感情も、スラッグの中にはある。

「私はエクシキューターでも、地下の味方でもないわ。格好良く言うくと、行く末を見守る者つてところかしらね」

アンジエは地下では、普通の人間達に自ら危害を加えようとはしなかった。それは、地下の味方だという事なのではなく、その時点で排除せずとも、最終的にはジオ・フロント共に排除するから眼中に無いだけなのだ。

「だから、仮にあなたとアンジエが戦う時も、私はどちらにも加担しないわ」

「何で、俺にそんな話を……？」

スラッグに話したところで、何かが変わるわけではない話だ。アンジエがジオ・フロントを破壊しようとしている事は、その時になれば解るはずだ。歴史も同様に、地上で生きていくのならばいずれ知る事になるだろう。

「気まぐれ、かしらね」

小さく苦笑するリアの表情には、どこか翳りが見えた。

「アンジエが私の事を嫌っているのは、ヴァーテクスである事を誇りに思っているアンジエと違って、私がエクシキューターじゃないから。エクシキューターとして、ジオ・フロントの破壊を行うアンジエが事故で死に掛けた時、私は手を差し伸べなかった」

ジオ・フロントを破壊しようとする者は少なくはないが、実際にそれを実行できる者は数少ない。元々、広大なジオ・フロントは世界中には数えるほどしかないのだ。それだけではなく、地上と地下の出入り口は極めて発見し難いものとなっている。見つけるだけでも一苦労なのだ。したがって、見つけた者がその場で手を下す事になる。

「私は全てを否定しなければ肯定もしない。それが私の意志」  
言い、リアは薄く笑みを浮かべてみせた。

「……じゃあ、おやすみ」  
テントへ向かって行くリアに、スラッグは言葉を返せなかった。  
ジオ・フロントを守る理由はない。だが、破壊する理由もスラッグにはない。話を聞いたところで、聞かなかった時と何も変わらないのではないだろうか。何もしないという事も選択肢の一つではある。  
風は、何も答えてはくれない。

朝、風の変化がスラッグを起こした。何か、人ではないものが近づいてくると、感覚が告げていた。テントから這い出し、周囲を見渡す。

「どうした？」

「何か、来る……!!」

目を覚ましたらしいアンジェの言葉に、スラッグは告げた。

「野生生物だな。気をつけろ、クリーチャーより手強いぞ」

スラッグの言葉に素早くテントから外へ出たアンジェが言う。

二人は背に翼を生やし、周囲の気配を探った。周囲の風がスラッグの感覚となり、接近してくる生物の位置を掴む。距離が近づいてくるにつれ、その生物の体型を把握する。狼や犬に近い、四足歩行の生物が五匹、接近して来るのが解った。

草むらを掻き分け、飛び出して来た野生生物とやらは見ただ目は大形の狼にしか見えなかった。ただ、身に纏っている風は危険なもの

だと告げていた。

周囲の草木に火を移さぬよう、アンジエは掌に白熱した炎を纏わせて狼に叩き付ける。焼き切られた身体が落ちた。溶断されたために切断面は焼け焦げ、傷痕から出血する事はない。アンジエの左右から飛び掛る野生生物が空中で爪を振るった。爪からかまいたちが放たれるのが解った。それを後ろに跳んで避けたアンジエが反撃の拳を撃ち込む。一撃必殺の炎で焼かれ、二体の生物が絶命する。

熱気が陽炎となり、アンジエの両腕から立ち上る。

背後に野生生物がいるのを風で察知し、スラッグは振り向き様に風の刃を放った。狼のような生物は爪からかまいたちを放ち、スラッグの攻撃を相殺する。クリーチャーやガードユニットにはできなかった事を、地上の生物はしている。それがスラッグを驚かせた。

別方向から放った風の刃をかわし切れず、生物が切り裂かれて絶命する。流れ出した血は赤く、それが自然の生き物なのだと再認識した。

ヴァーテクスならば、野生生物が少数であれば十分に対処できるだろう。しかし、野生生物すらもヴァーテクスに近い特異な力を使っていた。数が多ければ、ヴァーテクスとはいえ、必ず勝てるわけではないという事だ。

「他に何か感知できるか？」

「いや、これだけだ」

アンジエの問いにスラッグは答えた。

感知できる範囲内には敵性生物はいないようだった。風上の方に  
も何もなさそうだ。

地上に出たから二日が経っていた。スラッグ達は東の方へと移動を続けている。移動用の車両はなく、手段は徒歩だ。リアは、スラッグに話した事をレイシエには語らなかつた。それは、レイシエがアンジエと行動を共にする事が多かつたためである。アンジエがリアを嫌っているためか、二手に分かれての行動をする時、アンジエはレイシエもしくはスラッグとしか行動を共にしない。

「今日はこの辺で休むか」

前日よりも早い時間帯に、アンジエはそう提案して来た。テントを張り、夕食を取る。そして皆が眠りに着いて行く。ただ、スラッグだけは眠る事ができなかった。いや、眠っていないのはスラッグだけではなかった。

アンジエが起きている。呼吸などの起こす微細な風が、スラッグにそれを教えてくれた。眠っている時の呼吸ではない、と。

暫く時間が過ぎた頃、アンジエが身を起こし、テントを出た。十分に距離を取ってから、スラッグもテントを抜け出す。周囲を包む風が、アンジエの位置を教えている。ヴァーテクスとしての力を解放していない状態の風の間でも尾行には十分だった。

来た道を少し引き返すアンジエに、スラッグは確信した。

「……ジオ・フロントを壊すのか？」

「あ、いいえ。」

アンジエは頷いた。最初の一瞬は驚いたようだったが、すぐにその態度は元に戻った。スラッグならば尾行もでき、眠っていない事も気付けるといふ事が解ったからだろう。

「リアから話を聞いたんだな？」

「ああ、聞いた」

アンジエの言葉を、スラッグは肯定した。

この場で地上の事を知っているのはアンジエとリアしかいない。アンジエが話していなければ、リアしか地上の事を話せる者はいないのだ。

「……それで？」

「ジオ・フロントなんて破壊できるものなのか？」

「俺の力なら、比較的容易くできる」

スラッグの問いに、アンジエは言った。

ヴァーテクスの中には力を二つ持つ者も少なくない。アンジエも奥の手を持っている。二つともリアの言葉だ。

「……ジオ・フロントを破壊する意味はあるのか？」

「自然淘汰だ」

アンジエは言い切った。

地上の人類は皆、ヴァーテクスとなつてゐる。地下の人類は、地上で生きて行くのは極めて困難だ。地上での生活が困難だとして、地下に閉鎖空間を造つて逃げ込んだ人間達は淘汰される運命にある。アンジエはそう言った。

「いずれ、地下の人達も皆ヴァーテクスになるんじゃないのか？」  
スラッグは問う。

地下からも、スラッグやレイシエのようにヴァーテクスは誕生するようになってきたのだ。わざわざ淘汰せずとも、いずれ地下の人類もヴァーテクスになるのではないだろうか。

「それはない。地下では、ヴァーテクスはイレギュラーと判断されている」

アンジエの言葉に、スラッグは地下での経緯を思い出した。

都市から離れるまで、クリーチャーに追われ続けたのは、ジオ・フロントの生態系調整機能の存在故だ。生態系と人口調整のための排気機構クリーチャーを、ヴァーテクスはいとも簡単に倒す事ができる。それは地下の生態系と人口のバランスを崩しかねない。そう判断したジオ・フロントの機構は、ヴァーテクスの存在を消すためにクリーチャーを大量に投入した。

「ジオ・フロントの判断だけじゃなく、人間としてもイレギュラーにされる」

更にアンジエは言った。

そうして、自分の身を守るために力を使えば、いずれは周囲の人間にヴァーテクスである事が知れ渡るだろう。地下の人間達からしてみれば、クリーチャーは恐怖の対象だ。それを簡単に葬る事のできるヴァーテクスは更なる恐怖の対象となるだろう。そうなれば、ジオ・フロントの住民からも良い目では見られないだろうし、迫害もされる可能性があるのだ。

「理解できないわけではないんだろう？」

「……」

スラッグは言葉を返せなかった。

十分過ぎるほどにアンジエの言葉は理解できる。それでも、どこか腑に落ちない何かがある。

「手伝え、とは言わないがな。邪魔をするなら、同じヴァーテクスだろうと容赦はしない」

アンジエが言い放つ。

「でも、地下の人達は地上の人達に何もしていないじゃないか……」

「ヴァーテクスでない人類など、もうこの世には必要ないんだ」

「同じ人間だろ……？」

「……ヴァーテクスの恥だな、お前は」

「何だつて？」

アンジエの言葉に、スラッグは耳を疑った。

「お前の思想は危険だ」

瞬間、スラッグは辺りに殺気が満ちるのが解った。アンジエの纏う風が、スラッグへの敵意で満たされて行く。

「本気が……？」

「ヴァーテクスこそが人類だ」

スラッグの問いに答えず、アンジエは背に翼を作り出した。同時に周囲に熱気が満ちる。渦を巻くように周囲に拡散する熱気を浴び、スラッグは背筋に寒気を覚える。

「……そんなの、傲慢過ぎる」

本意ではないが、アンジエのしようとしている事はただの大量虐殺だ。地下で幸せに暮らしている人だって少なくはないだろう。その命を奪う権利などあるはずがない。

スラッグも、背に漆黒の翼を生やした。元から、アンジエを説得する事はできなかったのだ。だから、リアはアンジエから離れ、アンジエはリアを嫌うようになったのだろう。

周囲の風を把握し、アンジエの動きの予測に感覚を向ける。

アンジエが動く。右腕を自然体から左斜め上へ振り上げると同時に火柱をスラッグへと放ち、続いて左腕も同様にしてもう一本の火柱を放った。熱気が周囲に風を巻き起こし、地面に生えた草を燃やす。野生生物と違い、ヴァーテクス同士で戦う場合は余計な手加減などできないという事だ。

蠢く火柱に手をかざし、突風を柱の半ばに突き刺すように放つ。そうして炎に穴を開けて分断し、周囲の大気を動かして炎を上空へと吹き飛ばした。交差させた両腕を左右に開くように振るい、アンジエは炎を前面に撒き散らす。

熱気が髪を揺らす。炎に風の障壁をぶつけ、押し返すと共に掻き消した。

その風を突き抜けて突撃してきたアンジエの突きを、寸前で身体を横にずらして避ける。風の流れてアンジエの動きを先読みし、肘打ちと掌底をかわした。身を退いたところへアンジエは踏み込み、上段回し蹴りから下段回し蹴り、中段回し蹴りと流れるように繰り出される蹴り技を、屈み、跳躍し、腕で受け止め、スラッグは防いだ。受け止めた足を掴み、纏った風で加速させた掌底を放つが、アンジエは熱気を纏った腕でそれを弾いた。

瞬間的にアンジエは、身体を水平にするように軽く地面を蹴って跳躍し、その足でスラッグの腹に蹴りを放つ。掴んでいた足を放し、スラッグはアンジエが放った蹴りを外側に弾くようにして防ぐ。

「ジャベリン！」

倒れた体勢から、アンジエが炎の槍を放つ。

「っ！」  
咄嗟に右腕を左から外側へと払うように振るい、風を巻き起こした。

強烈な炎は風を起こす。その風を捻じ曲げる事で、炎の進路自体をもずらす。スラッグは炎の槍を防ぎ、後方に跳んで距離を取った。

「……甘いな」

アンジエが呟いた。

その言葉が指す内容は、直ぐに解る。スラッグからアンジェへの攻撃はなく、全てが反撃のみだ。つまり、スラッグはアンジェすらも殺さぬようにしようとしているのであった。その思いが、スラッグにアンジェへの攻撃を踏み止まらせている。

「二人とも何やってるのよ!」

不意に、二人の間にレイシエが飛び込んだ。

「レイシエ……!」

「何してるの……? 二人が戦う理由なんてないじゃない……!」

離れた場所から、リアが見ているのが、解った。スラッグの感覚の認知内にリアがいる。ただ、リアはレイシエに何も言っていないのだらう。

「……アンジェは、ジオ・フロントを破壊しようとしているんだぞ」

「知ってるわ!」

「なっ……!」

「地上に出た日の夜、アンジェから直接聞いたの」

そのレイシエの言葉に、スラッグは絶句した。

レイシエは、地上の事全てを聞いている。スラッグの知っている事は全て、レイシエも知っているのだ。しかも、その上でレイシエは二人が戦う理由がないと言った。

「……本気で言ってるのか、レイシエ?」

常に周りの人達の事を考えていたはずのレイシエの言葉が、信じられない。

「だって、ジオ・フロントを壊すのにはアンジェなりの理由があるのよ?」

「地下の人達はどうなるんだよ……!」

ジオ・フロントの子供を守るために力に覚醒したレイシエが、ジオ・フロントの破壊に肯定的だというのが、理解できない。全てはスラッグの思い違いだったとしても言うのだろうか。長い間、共に過ごして来たというのに。

「閉鎖空間から解き放たれるんだよ……?」

レイシエの言葉に、スラッグは気付く。恐らく、アンジエとリアでは話の仕方が違ったのだ。同じ内容の部分は共通であっても、アンジエはレイシエを味方に引き込むような脚色をしたに違いない。恐らく、アンジエはジオ・フロントを壊す、と言っただけで、地下の人間を全滅させるとは言っていないのだ。確かに、閉鎖空間から解き放たれるとしても、死んでしまうのだ。

「ジオ・フロントが破壊されたら、皆死んでしまうだろ！」

「そりゃあ、被害がゼロだとは思わないけど……」

地下にクリーチャーがいるのは、地下が閉鎖空間だから。閉鎖空間でない場所には、クリーチャーはいない。クリーチャーのいない世界に行けるなら、ジオ・フロントの人達にとってはプラスになる事なのではないか。それがレイシエの理屈だった。

クリーチャーのいない世界が死後の世界とイコールであると考えていないレイシエに、スラッグはただ当惑するしかない。

安易に、アンジエに騙されているなどと口走れば、逆効果だ。アンジエを信じ切っているレイシエを、スラッグが説得する事は不可能に近い。外の世界、本当の世界へと連れ出してくれたアンジエは、レイシエにとっては信頼に足る人物になっているのだから。

立ち位置も、スラッグからアンジエを守るように、レイシエはスラッグを真正面に見て立っている。

「……どうする？ 続けるか？」

アンジエが言う。何も感情的な部分は込められていない、ただの問い掛けなのに、スラッグには挑発のようにしか聞こえなかった。

「スラッグらしくないよ」

「！」

レイシエの言葉はショックだった。

もはや、この場にスラッグの味方と呼べる人間はいない。リアは完全に中立だと宣言し、スラッグもその部分は了承している。アンジエとレイシエが組んでしまえば、スラッグはたった一人の抵抗者になってしまう。

「俺にとっては、今のレイシエの方がらしくないように見えるんだよ」

レイシエから視線を逸らし、スラッグは言った。

周りが見えなくなるほどにアンジエ寄りになってしまったというのだろうか。

「退く気はないんだな……？」

アンジエが問う。

退いた方がいいのかもしれない。そんな考えが頭を過ぎる。所詮は皆、自分と友人知人が生きてさえいれば良いのだという考えが頭に浮かんだ。無論、それも間違った考えではない。直接関わる事のない他者など放っておけば良い。直接関わる事ができないのだから、どうにかしようと思う方がおかしい。

違う！

地下の生活を捨てて旅立つ時、竜型クリーチャーにスラッグ達の街が襲われた時、レイシエは勝ち目がない相手であっても、放っておくという考えを選ぶのが厭だったのだ。スラッグは、そんなレイシエに惹かれていたはずだ。

「どいてくれ、レイシエ……！」

「スラッグっ！」

「俺はレイシエが好きなんだ、巻き込みたくないし、大量虐殺の手助けなんかさせたくない」

「私が好きなら、退いてよ！」

「余計退けない……！俺が好きならレイシエは、どんな状況でも周りの人を助けようとしていた！」

この状況でアンジエはレイシエを敵に回すほど馬鹿な事は言わないだろう。どの道、アンジエを倒すしか手がない。

「……無駄な事を……」

アンジエが呟いた。ゆっくりと歩み出て、レイシエの傍まで近付いてくる。その言葉はスラッグにかけられたものだったのか、レイシエにかけられたものだったのかは解らない。

「少し、寝ていてくれ」

そう言い、アンジエはレイシエの肩に手を置いた。

「あ………」

瞬間、レイシエが静かに気を失った。目を閉じ、倒れるレイシエを受け止め、アンジエは離れた場所まで連れて行く。

「何をした……！」

「問題ない。気絶させただけだ」

戦闘に邪魔になるであろうレイシエを、遠ざけた。つまり、アンジエはスラッグのみを敵と認識しているという事だ。

「俺は……お前だって殺したくない」

歯噛みし、スラッグは言った。

「だが、お前はジオ・フロントの破壊を望んでいないんだろう？」

殺気の籠った視線がスラッグに向けられる。自然体で立つアンジエに、身構えている時と同じだけの威圧感を感じた。

「……なら、言つてやろう。俺は地下の人間を皆殺しにしたいんだ」  
「……！」

アンジエが言い放つ。その目に偽りなどは無く、はっきりと本心から出したものであると理解できる。スラッグを挑発しているわけでもなければ、スラッグが攻撃しやすいような言葉を選んだわけでもない。

ヴァーテクスである事を誇りに思っている者もいると、リアは言った。それは、突き詰めて行けばヴァーテクスでない者は人間ではないと言つ事にも発展する。アンジエがその最たるものなのだろうか。

「これから俺はお前を全力で排除する。阻止したければ、お前も全力で来い」

同じヴァーテクスであるスラッグへの騎士道精神なのか、アンジエはそう告げた。

「アンジエ……！」

もう戦いは避けられない。そう判断したスラッグは身構えた。

瞬間、空気がブレた。

「！」  
スラッグの右腕が、上腕部から弾ける。

空気の破裂するような音が響き渡り、スラッグの右腕が身体から離れた。腕が床に落ちた事を、脳が理解していない。身体も認識していない。血が溢れ、滴り落ちた。

間を置いて激痛が襲う。咄嗟に左手で肩を強く抑え、血流を押し留めようとする。痛みに出ず、全身が硬直していた。

「終わりだ……！」

アンジエの言葉が微かに聞こえた。

風の動きが、反射的にスラッグの身体を動かしている。後方へ退くように身体を引いた瞬間、衝撃。

「が！」

左目が弾けた。

身を退いていなければ、頭が吹き飛んでいる位置だった。左目が吹き飛び、瞼も巻き込んだのか、夥しく出血する。

左側の視界が失せ、激痛だけが残る。足を踏み外し、仰向けに倒れた。その衝撃が腕に響き、激痛が全身に響き渡った。

アンジエのもう一つの能力。それは振動波を操る事だ。複数の箇所から放った振動の波長を一点で合わせる事で、振動の幅を極限まで膨らませる。その莫大なエネルギーは全てを破壊する衝撃となる。波長は組み合わせる程に強大になり、そのエネルギー量は比例ではなく、加速度的に上昇していく。風の揺れが、それを教えてくれた。複数の箇所から微細な空気の振動を感じ取り、スラッグはその場から風の力も借りて飛び退いた。直後、地面が大きく抉れる。

「くそっ……！」

片膝を着いた体勢からアンジエに風の刃を放ち、スラッグは立ち上がった。

激痛が走るが、ヴァーテクスとのトランス状態であるためか、痛みは感じても動けないほどではない。本来ならば、痛みでのた打ち回

ついてもおかしくはないだろうに。

立ち上がり、ふらついた。片目が無いだけで、遠近感が掴み辛くなっている。

アンジエは風の刃を、身に纏った陽炎の揺れを見て回避して見せた。

「黒い翼と言えど、力に慣れていなければこの程度か……」

言い放ち、炎の槍を放つアンジエに、スラッグは風の防壁で攻撃を防いだ。直後、空気が揺れた。飛び退いた瞬間、足元が破裂し、吹き飛んだ。土と草が爆ぜ、周囲に飛び散る。

空中から風の刃を周囲に放ち、それら全てを軌道修正してアンジエへと向かわせる。同時にアンジエの周囲に竜巻を起こし、行動を制限させた。アンジエは全身に炎を帯び、その炎を竜巻へと流し込んでいった。渦を巻いて立ち上る火柱と化した竜巻に、放った風の刃が全て掻き消された。その上で、竜巻を飲み込んで巨大な火柱となった炎を上空へ立ち上らせ、スラッグの真上に落下させた。

周囲の大気の流れを練り込み、空間が歪んで見えるほどの密度の風を身に纏い、スラッグは炎の柱の中央に風を打ち込み、内部へ周囲に発散させて火柱を破裂させた。飛び散る火の粉を風で吹き消し、濃密な大気を鋭利な刃物と化し、アンジエへと打ち込んだ。

その風が、弾けた。振動波の衝撃を、風、大気分子の運動へ影響を与えるように放ち、爆発的な風の流れを起こして打ち消したのだ。風を乗り越えて突撃してきたアンジエが繰り出す上段回し蹴りを屈んでかわし、突き出された拳を横に跳んでかわし、スラッグは左腕を薙いで風の刃を叩き付ける。腕の延長線上の刃を、アンジエは屈んでかわし、掌から拡散する炎を撒き散らした。凄まじいまでの熱気が陽炎となり、空気を歪ませる。

風を纏い、炎を掻き分けてアンジエに跳び蹴りを繰り出す。その足を受け止め、掴むアンジエに腕を薙ぎ、風の刃を放つと共に腕を振るった慣性を利用して身体を捻り、もう一方の足で蹴りを放った。風の刃を身体を身体を半身にしてかわしたアンジエの顔面にスラッ

グの蹴りが入った。

吹き飛び、背中から地面に倒れたアンジェに、スラッグは更に風の刃を打ち込む。地面を転がってかわし、跳ね起きたアンジェが口の端から垂れた血を腕で拭う。蹴った際に切っただらしい。

「バーニング・サークル！」

アンジェが手をかざす。

スラッグを取り囲むように熱気が集約し、陽炎がスラッグを包み込む。逃れようとした瞬間、スラッグを中心に円を描くように炎が燃え上がり、それが上へと柱のように立ち上っていく。炎の壁で周囲を囲まれ、熱気と陽炎に包まれた。息苦しい空間の中、空気が揺れる。振動が放たれ、スラッグは空中へと逃れる。足場が吹き飛び、空中へ向けられた振動に、風で身を包んで軌道を変えてかわした。

風の密度を高め、炎を貫こうとした瞬間、上空の大気が動くのを感じた。炎の柱は上空の変化をスラッグに隠すためのものだったのだろう。だが、気付いた時には遅かった。

「ブレイク・ダウン！」

凄まじいまでの衝撃が地面に叩き付けられる。

スラッグの叫びが掻き消され、地面に弾き倒されても尚、衝撃は地面を叩き続けた。全身が押し潰されそうな衝撃に、身に纏った風が振動を和らげているのを感じる。

炎は消えても、アンジェは両手を下へ押し付けるように構えたまま、力を放ち続けている。地面に亀裂が入り、地響きが周囲に広がって行く。亀裂も広がり、やがてはスラッグは背中が地面に減り込んだのを感じた。

「崩れ落ちろ、ジオ・フロント！」

アンジェが叫んだ瞬間、波長は地面へ浸透し、内壁や通路を構成する全ての素材の分子が揺さぶられ、崩壊し始める。

凄まじいまでの音を周囲に響き渡らせ、地面が崩れた。周囲の土や草をも巻き込み、地面が陥没する。その裏の内壁も崩壊し、スラッグはジオ・フロントの内部へと叩き落された。

「あああああああああああああ！」

絶叫するスラッグに、尚も衝撃は叩き付けられていた。内壁に映し出された空が見えた。ジオ・フロント内部の気圧制御によって創られた雲を突き抜ける。

凄まじいまでの衝撃に意識だけでなく、身体までもがばらばらに吹き飛ばされそうになる。だが、共に叩き落された土や草、背面で圧縮された空気がクッションとなり、本能的に身体が放った力が落下のコンマ数秒で速度を激減させた。傍から見れば、共に落とされたものが吹き飛ぶ様から、地面に激突して見えただろう。

周りのざわめきが聞こえた。どうやら、都市内に落ちたらしい。

数回咳き込み、血を吐きながら、スラッグは天井を見上げていた。背中の翼は消えている。身体から力が抜けているのが解った。生きている事が信じられないと感じると共に、安堵もしていた。その安堵感がスラッグの気を抜かせたのだらう。

天井には、穴が開いたとは感じられない。それほどまでに、小さな箇所に穴が開いたという事だ。だが、今の力を見た限りでは、アンジエはジオ・フロントを崩壊させる事ができる。

物珍しさか、奇怪さか、周囲の人達は近寄って来ない。当然だろう、いきなり人と地面、それに得体の知れない材質の金属が落ちてくれば驚きと共に恐怖も覚えるはずだ。

軍か、警察機構かが到着したのだらう、複数の人間が近付いて来る。

「何がどうなってるんだ……？」

「おい、酷い怪我だぞ」

「事情の知っていそうな奴がこれだと、困るな」

「意識はあるのか？ 命に別状はないみたいに見えるぞ」

騒ぎ始める人達に、咄嗟に声が出ない

「……！」

直後の事だった。

天井が大きく崩壊するのが見えた。穴が開いたと解るくらいの大

きさで、天井が崩落する。その中央、頭上に赤い光が見えた。

「アンジエっ！」

瞬間、スラッグは飛び起きていた。

急速に落下してくる炎の塊は、真つ直ぐに落下してくる。都市上空、スラッグがアンジエだと認識できる距離まで辿り着いた火球は周囲に炎を放つと共に背中 of 翼を大きく左右に開いた。

「まさか、生きていられるとは思わなかったな、ドラグ」

アンジエが言った。

「な、何だお前は……！」

周りの人達がざわめき、アンジエに注目する。中には天使だなどと言う者もいる。警察たちは銃を向けているが、明らかに動揺していた。

「ヴァーテクス。真の人類だ！」

言い、アンジエは周囲に炎を撒き散らした。赤い炎は熱気を放ち、街を焼き尽くし始める。

「アンジエ……っ！」

逃げ出そうとする人々に向かって、アンジエは躊躇う事なく炎を放った。

赤く燃え盛る炎に、人々が絶叫しながら逃げ惑う。

乱れた息のまま、スラッグは背に漆黒の翼を生やした。それに周りにいた人がざわめき、注目する。その人々へ向けられた炎を、スラッグは左手をかざして風を起こし、掻き消した。

「レイシエはどうした……？」

「安全な場所まで運んでから来た」

スラッグの言葉に、アンジエは答え、炎を連発する。

その尽くを風で吹き払い続ける。一瞬、大気の流れを感じ、スラッグはその場を飛び退いた。風で周りの人達も吹き飛ばす。直後、スラッグの立っていた地面が弾けとんだ。

「ば、化け物だぁーっ！」

誰かが叫び、逃げ出す。その男に、眉根を寄せたアンジエが炎を

放つ。スラッグは男を風で吹き飛ばし、炎を避けさせた。

「貴様も俺と同類だと言うのに、何故助ける！」

「拒絶が敵意になるって解らないのか！」

「先に拒絶したのはそいつらだ！」

「だから滅ぼすなんて、終わりが無いじゃないか！」

「旧人類が滅びれば終わる！」

「なら、ヴァーテクスを越えた存在が現れたら、お前は自分が死ぬばいと思うのかっ！」

炎と風をぶつけ合い、力の限り叫び合う。

「淘汰される存在になるのなら、滅びるはずだ！」

言い、アンジエが衝撃を放った。

寸前で直撃をかわしたが、衝撃波を浴び、スラッグは吹き飛ばされた。建物の壁に背中を打ちつけ、地面に倒れる。左手を着き、顔を上げた先で、アンジエが地面に足を着けていた。

周りで銃を構える警察隊を炎で薙ぎ払い、歩いて来る。

不意に、スラッグはアンジエの歩いて来る直線の脇に、小さな女の子が震えているのに気が付いた。足が竦んで動けないのだろう、がたがたと身体を震わせてアンジエを見上げている。瞬間、アンジエがその女の子に気付いた。目を向け、腕を振るおうとする瞬間、スラッグは地を蹴り、女の子を左手に抱くようにしてアンジエの前から遠ざけさせていた。離れた場所に女の子を下ろし、振り返った直後に放たれたアンジエの拳を、左手で受け止める。

熱量で赤い光を帯びたアンジエの拳を、濃密な風を帯びた手で受け止める。熱を感じるが、風でだいぶ冷却できていた。火傷を負う寸前の熱を左手で受け止めていた。

「これ以上は、やらせねえ……！」

スラッグは声を絞り出した。アンジエが眉根を寄せる。

背後にいる女の子はアンジエだけでなく、スラッグにも恐怖している事だろう。だが、そんな事は関係ない。スラッグは地下の敵ではない。ただ、それだけを自分の意志としてさえすればいい。

負けない。

心の奥底に何かが響く。  
力が脈動する。

身体の中央から全身へと力が溢れ出すのを感じた。  
瞬間、スラッグの背に、もう一つの翼が生えた。左側一方だった  
漆黒の翼が、右側に対になるように伸びるのが解る。

「アンジエエエエエエエッ！」

スラッグの足元から風が巻き起こる。渦を巻くように立ち上り、  
周囲に凄まじいまでの突風を巻き起こす。掴んだ腕を引き寄せ、膝  
蹴りをアンジエの鳩尾に叩き込む。同時に、膝に纏った風を解き放  
ち、アンジエをその力の延長線上へ吹き飛ばした。

「があっ！」

吹き飛ばされたアンジエに、スラッグが飛び掛かる。

アンジエが腕を薙いで放った炎が、スラッグの身に纏った風で弾  
かれて消えた。左腕をアンジエの腹に下方から減り込ませ、纏った  
風がその力の方向へアンジエを跳ね上げる。

アンジエが衝撃波を起こすが、腕でそれを打ち消した。風を纏つ  
た腕が、振動を打ち消したのである。大気分子の運動として起こし  
た衝撃ならば、風で干渉できるとは言え、それは明らかに風の力だ  
けではなかった。

破壊の力。

そう呼ぶべきものなのだろう。スラッグのもう一つの力。全てを  
打ち壊す、力。

「ああああああああああっ！」

ジオ・フロントを破壊するほどの威力の衝撃を全身に浴びながら  
も、スラッグは上空へ打ち上げたアンジエへと突撃して行く。衝撃  
を全て全身に纏った風と、新たな力で打ち消して。

白熱した炎の槍を身に纏った風が裂く。身体中に打ち込まれる炎  
が、全て身に纏った風で弾かれ、後方へ流れて行く。それでも、ア  
ンジエは諦めずに攻撃を続けていた。

空気を歪めるほどの密度の風の刃を放つ。打ち消す事ができず、刃はアンジエに命中した。右脇腹と左肩を深く切り裂き、血飛沫が飛び散る。そのアンジエの首を掴み、スラッグは上空へと凄まじい速度で上昇して行く。

雲を突き抜け、アンジエが破壊した穴から、地上へと飛び出た。

加速を止め、停止すると同時にアンジエに蹴りを放ち、更に上空に打ち上げる。左手を後方へ引き、突き出すと同時に、手の延長上に風の槍を放つ。濃密な風は空気を歪め、アンジエを貫いた。

「……なら、お前の望む未来、見せてもらおうか……」

口から血を吐きながら、アンジエが呟いた。

突き刺さった風が、その圧縮された空気を周囲に撒き散らして消える。その風の破裂はアンジエをも吹き飛ばしていた。

血の雨を浴びながら、スラッグはただ、青空に向かって叫んでいた。

## 終章 「ウインド」

### 終章 「ウインド」

川のほとりに、レイシエとリアがいた。スラッグは周りの風を感じて二人を捜し当てた。かなり広い範囲でジオ・フロントの天井は破壊され、大きな穴が地面に開いていたが、両翼になったスラッグの能力は風之力も軒並み強力になっており、認知範囲が拡大していた。そのため、そう時間をかけずに二人を探し出す事ができた。

レイシエは気絶したままだったが、リアは右腕と片目を失ったスラッグを見ても何も言わなかった。

リアは、アンジェからレイシエを預かったらしい。被害が広がった時に死なせないようにしてくれと言われたのだそうだ。

その説明を、スラッグは川で身体を洗いながら聞いた。血まみれになった服は、捨てる事にした。特に上半身の服は片腕の部分が途中で千切れている。

着替えが終わったところで、スラッグは木に背中を預けて右腕を押さえた。今になって痛みが激しくなってきた。左目も、奥の方からずきずきと痛んでくる。

「じつとしていてね」

言い、リアは背に翼を生やすとスラッグの左腕をどけ、輝きを帯びた手で右腕に触れた。

「……治療、できるのか？」

「ええ、治療というよりは、復元だけだね」

小さく苦笑し、リアはスラッグの腕に力を放ち続ける。

身体が再生していくのは、見ていても不可思議な光景だった。暖かな光に包まれて、腕が伸びていく。心地良い暖かさは傷口から身体の中にまで浸透するほどのものだ。ゆっくりと、時間はかかったが、白い光で覆われた腕が、指先まで形作られた。その光が、傷口

だった場所から消えていく。

「傷痕は完全に消せないわね」

復元された腕と、破壊されていない身体との境目には傷痕が残った。痛みはもうないが、傷痕が消える事はないのだろう。

「腕があるだけでもありがたいよ」

苦笑し、スラッグは言った。両腕に戻っただけでもありがたい事だ。願ってもいなかったのである。

「次は目ね」

言い、リアはスラッグの左目に手を被せた。

暗闇だった左側の視界が、白く染まる。同時に、痛みが消え、暖かさが広がって行った。

「こっちも、傷は完全に消えないわ」

「いいよ、見えれば」

スラッグは小さく笑んだ。

左目の視界が戻った。川を覗き込んで顔を見れば、そこには翡翠色の左目があった。瞼には縦に深い傷痕が残っているぐらいだ。生活に支障はないどころか、失ったままでいるよりは遥かに良いだろう。傷痕が残っただけで、元の五体満足な身体に戻ったのだから。

「……レイシエは？」

「そろそろ気付くと思うわ」

木に背中を預けると、スラッグはリアに問うた。

アンジエは、レイシエの身体に軽い衝撃を送り込み、気絶させたのだという。

「ジオ・フロントはどうするの？」

不意に、リアが尋ねた。

「どうしようもないよ。内壁は俺には修理できないし……」

スラッグは答え、今まで戦っていた方角へ視線を向けた。

ジオ・フロントの天井は壊れたままだ。だが、それを修理する事はスラッグにはできない。地上でも地下でも、既に内壁の素材を作り出す技術が失われていると言ったのは、リアだ。素材が無い上に、

ジオ・フロントの修理の知識の無いスラッグには修理はできないだろう。ジオ・フロント内に自己修復機能があれば、時間はかかっても放って置けば大丈夫だとは思うが。

「それよりも、俺の傷を治しても良かったのか？」

リアは中立の立場ではなかったのか、そう問いかける。スラッグとアンジエのどちらにも加担しないと、リアは言っていたのに、戦闘後にはスラッグの治療をしてくれた。

「怪我人がいれば大抵治すわ。地上でも、地下でも、ね」  
言い、リアは微笑んだ。

つまりは、アンジエが勝っていれば、リアはアンジエの傷を治したという事だ。自分の力が必要な人がいれば、使う。それが彼女の理念なのだろうか。

「……うん……」

不意に、隣に寝かされていたレイシエが呻き声を上げた。

そうして、ゆっくりと目を開けると、飛び起き、周囲を見回した。

「こ、ここは？」

「進行方向を少し進んだところね」

場所の解らないスラッグに変わり、リアが答えた。

「アンジエは……？」

リアを見て、スラッグを見て、レイシエははっとしたように言った。

何か言おうか迷っているリアにスラッグは小さく首を振り、レイシエに向き直ると口を開いた。

「アンジエは、俺達とは別の道に行ったよ。……旅に、出たんだ」

「え……？」

その言葉に、レイシエがスラッグを見る。リアは視線を逸らしていた。

「相当俺が嫌いになったらしくつてな……」

苦笑し、スラッグはレイシエから視線を逸らした。

「そんな！ あの後、どうなったのよ！」

「……和解したよ、したけど、さ」  
苦笑いしかできなかった。

「アンジエはどこに向かったの？」

「場所は、知らないよ」

地上に来たばかりだから、そう付け加える。

「じゃあ、どっちに向かったの？」

レイシエの言葉に、スラッグは無言で顔を逸らした。

視線は、さつき戦った場所とは違う方向でもあり、スラッグ達が向かっていた東の方角とも違う方向へと向けた。それが答えだといふかのように。

「リアさん、黙って見てたんですか？」

「私はアンジエに嫌われてるからね」

スラッグに視線を向けてから、リアはレイシエに苦笑した。

「そんな……」

レイシエが顔を伏せた。

「……私、アンジエの後を追っわ」

暫く考えていたレイシエは、やがて、顔を上げてそう言った。

「……本気、なんだな？」

その真剣な青い目を見つめ、スラッグは問う。レイシエは、しっかりと頷いた。

「そんなに、アンジエが好きなんだな……？」

感情を押し殺し、スラッグは問う。

レイシエは 頷いた。

スラッグは目を閉じ、大きく、ゆっくり深呼吸すると、目を開けてレイシエを見る。

「……なら、ここで別れよう」

「え？ 何言ってるの？」

理解できないとも言うように、レイシエが首を傾げた。

「俺は、アンジエを追う気はないんだ」

「どうして？ 一緒に行きましょうよ……」

「言っただろ、俺はアンジエに嫌われたんだ、って……」  
誘うレイシエに、スラッグは言った。

「でも……」  
「早くしないと追いつけなくなるぞ。もう、あれからだいぶ経つて  
るんだから」

尚もスラッグを誘おうとするレイシエに、スラッグは言った。

「……解った」

残念そうに頷き、レイシエは荷物をまとめ始めた。

一人分、食料を分けて纏め、レイシエは自分の持つて来た荷物の中に入れた。携帯用の調理器具は、リアが自分自身の旅のために一式持っていたため、スラッグとレイシエが持っていた一セットはレイシエに持たせる事にした。

「本当に、行かないのね……？」

別れる直前にも、レイシエはスラッグにそう言った。

「ああ……」

早く行けと、言いそうになるのを堪える。

「……じゃあ、またね、スラッグ」

「……さよなら、レイシエ」

背を向けるレイシエに、スラッグは別れの言葉を告げた。

もう、二度と会う事はないだろう。遠ざかって行くレイシエを見届けて、スラッグは座り込んだ。炎と水は干渉し合うが、風と水は直接干渉し合う事はない。そういう事なのだろう。

「あれで本当に良かったの？」

「言えねえよ……。俺が殺した、なんて」

立ったままのリアがかけた言葉に、スラッグは顔を伏せたまま答えた。

殺した、とは言えなかった。レイシエを守るために覚醒した力で、レイシエが惹かれたアンジエを殺した。考えてみれば酷いものだ。

「彼女も不憫ね……」

好きな人は、レイシエを想うアンジエに殺されてしまった。それ

を知らず、気を使ってスラッグが旅に出たと言えば、アンジェを追いかけると言ったレイシエ。

「あなたはどうするの？」

「……今なら、ジオ・フロントにも戻れるしな」

顔を伏せたまま、スラッグはおどけて言った。だが、リアに隠した伏せた頬を涙が伝う。

「仕方ないわね、少し付き合っただけあげるわ」

苦笑交じりに溜め息をつき、リアは言い、スラッグの肩に手を乗せた。

「悪いな……ほんと……」

リアに見えぬように涙を拭い、スラッグは立ち上がった。

大きく息を吸い、吐き出す。それで強引に気分を入れ替える。拭い去れない感情は、心の内に押し込んで。

「……さてと、これから、どうすっかな」

青空を見上げて、小さく呟く。

今まで地下で暮らしてきたが、今は地上にいる。地下と違う事は数多くあるだろうが、生きていくためには何かしなければならんだろう。狩猟で生きていけるわけではないのだ。街へ行き、生活資金を稼ぎ、生きていかなければならない。

何をする事だってできる。地下でも、地上でも、それは変わらない。スラッグは自分の思う通りに選択肢を選んで生きてきた。その結果ならば、たとえレイシエと別れようとも文句は言えない。それが、スラッグの望んだ結果なのだから。

風が吹いた。柔らかな風が、スラッグの長い髪を揺らす。

世界は広い。したい事が見つければそれをすればいいだろうし、見つからなければそれを探すために動き回ってみるのもいいだろう。

風は、自由なのだから。

Like A Wind

終

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4515b/>

---

Like A Wind

2008年11月7日08時06分発行